佐兵ばなし

木小屋話資料

編　山形民話の会・武 田　　正

佐兵ばなし

木小屋話資料

編　武田　正

木小屋話資料　佐兵ばなし

第一部　佐兵ばなし
1 豆腐のすだれ　六
2 死んだ馬が草食う　一〇
3 ねずみとり　一四
4 酒の只飲み　一五
5 田植の名人　一八
6 彪の皮の屋根　二四
7 煮たった湯を飲む　二八
8 苗の逆さ植え　二九
9 二十才が出た　三〇
10 十一毛の猫　三二
11 煙草の虫取り　三三
12 嶋蔵さんと謎問答　三五
13 しらみ五升質入れ　三七
14 三味線をひきずる　四〇
第二部　長手の伊佐
1 船坂新兵衛と長手の伊佐　八四
2 馬場数衛宅へ新兵衛が入る　八七
15 植木売り　四三
16 桑こき　四四
17 えじこ作り　四五
18 酒の篭抜け　四七
19 ローソクを持ち出す　五六
20 米を運ぶ　五八
21 役人の頭を打つ　六二
22 旦那に行きたくない金　六四
23 菓子の只食い　七三
24 半鐘買い　七五
25 鰊屋が抜がっだ話　七六
26 屋根葺と知恵くらべ　七七
27 ソロバンの九九　八一

3 六尺の桶 八八
4 名主どんの香炉 九〇
5 偉駄天 九二
6 水遁の術 九三
7 吉兵衛さんと伊佐 九五
第三部　名物男佐兵次の逸話・他
1 露藤の生んだ名物男・佐兵次 一一〇
2 口説き節（悲恋の佐平） 一一五
3 番所の役人に小便を呑ます 一一八
4 虱子五升の質入れ 一二一
5 弊馬草を食う 一二五
6 芋あぶりと豆腐汁の馳走 一二七
7 十一毛の猫を見て来た 一三三
8 五輪窪狐の狂歌 一三五
9 十手風を吹かす役人をこらす 一三八
10 いぢこ作り高慢な男をこらす 一四三
11 砂糖一樽みな食う 一四七
12 魚屋問答 一五〇
8 伊佐の最後 九八
9 三反歩の田圃を盗んだ話 一〇一
10 和田の女主人にカブトをぬぐ 一〇二
11 ネズミに化けて生糸を盗む 一〇四
12 沢中の喜太郎 一〇六
｜安部名平次編｜
13 金の無心した浪人者を追返す 一五三
14 嶋蔵さんと謎問答 一五四
15 彪の皮で屋根を葺く 一五七
16 武士問答 一六〇
17 琵琶頸の俗地名と十三・七つ 一六三
18 豆腐であんだ雪がけのこと 一六五
19 天才的な田植の名人のこと 一六八
20 佐兵次の口説節 一七〇
21 三味線を引きずること 一七一
22 屋根葺と知恵競べのこと 一七三
23 自分が食うには足りない 一七七
24 御法度の糯米を持ち込むこと 一七九
凡例（四）　あとがき（一八二）

凡例

1　第一部は話者の語りをテープに収録した上、語りそのままに記述したものである。話者の住所は次の通りである。（敬称略）

近きよ（高畠町糠野目）渡辺金五郎（同露藤）安部茂次（同）今井勇雄（同）吉田広（同金小屋）佐藤宇之助（南陽市椚塚）川井宝衛・川井弥右ヱ門（同大橋）清野キヨ（米沢市）髙橋照太郎（同上野）三瓶ちの（同大橋）安部忠内〔稿〕（米沢市・故人）

2　第二部は安部忠内稿（故人）武田正編『鬼の骨』『つゆふじの伝説』と今井勇雄氏よりの話、および「長手の伊佐・東北怪盗伝」菅野新一（「青森森友」昭和34年5月号所収）より整理したものである。なお「沢中の喜太郎」は西置賜郡小国町の塚原名右ヱ門氏の語りで、小国町の快盗譚である。

3　第三部は安部名平次氏の筆による「名物男佐兵次の逸話」の十六篇と、先に『佐兵物語』（高畠町文化財保護会刊・安部名平次編・安彦好重印刷・昭和三十三年四月十日発行・孔版）によって不足を補ったもので、前者の方が資料としては重要であろう。十七より二十四までが「佐兵物語」に依ったものである。

4　なお第一部収録の「高橋照太郎氏」の「佐兵ばなし」は、「稲場の平次」として語られているとも言う。

第一部　佐兵ばなし

1　豆腐のすだれ

（1）

佐兵があるとき来て、「いや、今日、米沢城下さ行ったところが、豆腐で編んだすだれ見てきた」て言うたど。

「何つかしている。すだれを豆腐で編んだりされんめぇちゃい」

「ほだたて、おれぁ見て来たぜ」

「ほんじゃ、行ってみろ」

て言うわけで、わざわざ米沢の城下まで行ったずま。そしたところ、普通のすだれ、ぶら下っていたずま。

「やっぱり、縄で編んだすだれだ、どれ」

「一封（ひとふ）、二封、三封、四封、…」

て数えて、

「やっぱり、十封（とうふう）で編んだのだどれ」

て、佐兵が言うたど。

（川井弥右ヱ門）

（2）

馬鹿佐兵がよ、筑茂の豆腐屋で、「豆腐で拵ったすだれあっけぜ」て、こう言うたど、馬鹿佐兵よ…。

「佐兵、馬鹿な、ほに、なんぼしたって、豆腐ですだれ編まれっか」

て言うたど。そしたらば、

「んじゃらば、賭しんべが」

かまわず賭ざぁしった人だったど。そして、賭すんべと言うもんだから、何の賭だったか知しゃねげんども、行ってみたんだど。

「一封、二封、三封、四封、…」

て、数えたんだど。そしたば、「十封（とうふう）」あったずも。

「ほうら、豆腐（十封）で編んだすだれざぁ、このことだ」

佐兵には、いやいや…。

（三瓶ちの）

（3）

一封、二封、三封…て編んだそうだ。十封（とうふう）で切れば十封のすだれだ。ある人、「豆腐で編んだすだれなどあんまぇちゃ」て、なて、もっとも、豆腐で編んだすだれなてないもんだからな。「一封、二封、三封…て、ずうっと十封て、十でやめたから、豆腐で編んだすだれざぁ、このごんだ」て。

（渡辺金五郎）

（4）

雪垣の編封が、八封で編むことが決まってるんだ。それを六尺の高さで両端つけるもんだから、八封になっていんのよ。「今日、浅川さ行ったところぁ、豆腐で編んだ雪垣見てきた」て、こういう風に言うたど。

「豆腐で雪垣ぁ、編まれるもんでない」
「いや、おれぁ、豆腐で雪垣編んでだっけ」
「また、馬鹿なこと語る」
「珍らしい、行ってみろまず、豆腐で編んだ雪垣ある」
そして、行ってみたところが、その食い豆腐とばり頭さ行くもんだから、その人がうまくないのよ。
「勘定してみたら、ええがんべちゃえ、十あっでがや。珍らしいもんだ、こりゃ、こりゃ十封で編んだ雪垣だ」

（今井勇雄）

2　死んだ馬が草食う

（1）

佐兵が、またある日、「いや、とんだもの見てきた。今日は、死んだ馬が草食ってだな、見て来た」

「なんぼ馬だって、死んだ馬が草食う話なんて、あったもんでない」

て言うたところが、

「実際、あそこで食ってだから行ってみろ」

て、行って見たいというごんだ。そしたら、死んで馬が腐っていたもんだから、ぷんぷんすばらしい匂いしていたんだど。

「ほぉれ、死んだ馬が草食ってだべ」

て、佐兵にだまされたど。

（川井弥右ヱ門）

（2）

入生田が露藤、中島を通って米沢さ行く、むかしの江戸街道に五輪窪というとこあるのよ。そこんどこ通って行ったらば、馬一匹死んでだったって。そうして、くさくてくさくて、寄ってづけながったど。夏で腐って…。そいつ、佐兵ぁ見て来て、とんで跳ねて来たもんだから、若衆稼いだどこさ来て、

「あそこんどこに、死んだ馬草食ってだけ」

「また、佐兵ぁ、とんでもないことばり語んぜはぁ、死んだ馬草食ったりしないごで」

みんな、あしょらわねげんども、あしょらった者もいだったずも。

「ほんじゃ、嘘だか何だか行って見てこい」

「ほだな、死んだ馬草食ったりしてねごで」

「いや、行って見てこい、行くじど分(わ)かっから」

「ほんじゃ、佐兵、どこにいたか歩いでみろ」

暇な人だから、行くも。「なじょだ」「いや、臭くて臭くて、とっても寄ってつ

かんね、臭くて臭くて…」
「ほだべ、臭くて臭くてだべ、草食ったべ」
いつでもそういう風に馬鹿されんの承知だげんども、いつも引っかけんなだど。

（近　きよ）

（3）

「いやいや、今、浅川さ行ってきたところぁ、死んだ馬が草食ってたという、どうも不思議なこともあるもんだなぁ、死んだ馬が草食ってた」
なて、世間の人から言わっだど。
「やっぱり、佐兵なごんだから、また馬鹿なことつかしてる」
「馬鹿、本当だから行ってみろ、だまさっだと思って行ってみろ」
行ったところが、やっぱり馬が死んでるて、言うのよ。
「草食ってねでっか」
「この匂いみろ、臭くて臭くて、とっても…」

（今井勇雄）

（4）

「死んだ馬が草食ってだざぁない」「死んだ馬が草食う、て、あんべちゃえ」どかて、言うたど。「んじゃ、行ってみろ」て。夏なもんだから、死んだ馬に蠅からウジから湧いて、とにかく臭さがったそうだな。そうすっど死んだ馬など、まいどあたりは投げだんだな、当時は…。

そうすっど、「歩いでみろ」て、四五人連れて行ったそうだ。馬、いだどこさよ。河原さ。そこさ行ったところが、

「死んだ馬、草食ってるなんてない」

て行ったど。

「そら見ろ」

て、そりゃ夏なもんだから、蠅はたかる、ウジは湧いてる、とにかく臭くて困ったど。

「草食て、死んでいだざぁ、このことだ」

（渡辺金五郎）

3　ねずみとり

冬になっど、百姓はみな藁仕事しているど。佐兵は賭好きで、
「いやいや、あそこに四つ足の鳥いだっけ。四つ足の鳥、篭さ入ったけ」
「この野郎、四つ足の鳥なんていないべちゃ、鳥ぁ二本足だべちゃ」
「ほんじゃ、賭すっか、いたぜ、たしかに…」
「あまりええ、賭すんべ、四本足など持っている鳥、世の中にいないから、おらだ勝ったぞ」
「いやいや、お前の負けだ。実際見て来たなだぜ、篭さ入ったな」
「んじゃ、行ってみろ」
て言うもんで、みな行ってみたというんだな。そしたれば、やっぱり鳥篭さ猫入ってたけど。
「ほら、見ろ、四つ足の鳥いたどれ」
「鳥であんめぇちゃえ、猫だごで」

「鳥だごで、ねずみとりという鳥だごで…」
そして、佐兵に賭負けたというのだど。

（佐藤宇之助）

4　酒の只飲み

（1）

佐兵は冬になっど、藁仕事して、やんやんと居っどこさ、ちぇっと顔出すがったど。そうすっど。「佐兵来たらば、首はさんで呉れんべ」て、みな、戸の陰さ隠っで…。カラーッ…。

「何しった。今日は何としった、若衆」

て、首出した。そんで、首はさめて呉れんべどて、戸をぐいっとすっど、戸はパッと一尺ぐらいで止まんのだど。

そいつはちゃんと板っ端持ってきて、敷居さ置いて、上がっているから、首はさまんねんだど。そして、「えへへぇ」て笑って行くのだど。そして、とうしその藁仕事さ来て、いたずら語りして行くのだど。

（近　きよ）

（2）

佐兵という人は頓智で、人の酒を年中飲んでっから、

「今日は、あの野郎、はめないで小屋で酒飲みしろ」

て言うわけで、藁仕事明けに藁しどきに佐兵さ教えねで、蔵の戸びっしり閉てて、肉だの魚だの買込んで酒飲みしったんだど。ところが佐兵が知ってたもんだから、

「野郎べら、おれどこ嵌めない気だな。よし、嵌めないごんだら、また只で飲んで呉れんなね。んだげんど、なじょしてこの蔵に入ったらええがんべ」

佐兵、味付けたど。

「やぁい、こぼれっから、開けて呉ろい」

「なんだ、嘘ば、つかして、開けろなて」
「ほんによい、こぼれっからょい、何にもなくて一升桝さ酒買って来たんだず。こぼれっから開けて呉ろ」
野郎べらも、とんと本気にしたど。
「常に只ばっかり飲んでいるから、今日は一升買ってきたどこがれ」
て、蔵の中、ガラッと開けたど。そしたら何も買って来ねずだい。
「いやいや、寒くて涙こぼれっず」
て、蔵の中さ入って行ったど。
「いや、あそこで夫婦喧嘩みてきた。いやいや、妻が親父にぶんなぐらっじゃらば、妻怒って、火箸持って、親父の頭くらすけっどこ、親父ぁ何もないもんだから、ちょっと鍋の蓋とって、こう受けたのよ」
て、鍋の蓋とって頭にかざしてから、
「あらら、うまいことしったな」
て、鍋の中を見て、とうとう佐兵に飲まっだけど。

（佐藤宇之助）

5　田植の名人

（1）

四角い田さ、真ん中に、ちょぽっと入ってぐるぐると丸く植えたど。そして植上げたどこ見ると、横縦十文字、全部整うがったど。

「ずいぶん、佐兵さんが植えた田は、曲んねもんだな」

「んだからよ、おれ泣いっだなよ」

て、佐兵が言うたど。

「秋さなって、曲んね（穂が）と思ってよ」

（佐藤宇之助）

（2）

あるとき、遊んでばり歩くじだごでなぁ、気ぃ向き次第。田植しったとき、み

んな田植しったの見て、田の畔さ腰掛けでで、涙こぼしったて。
「なえだ、佐兵、泣いっだりして…」
「おれ、みんなの真似さんねもの」
「何の真似さんねごんだ」
「みんな、あがえ上手に曲げて、縄張っても曲げて田植えっどら。おれぁ縄張んねったって曲がんねも」
「なんだ、この野郎、人馬鹿にしたことばり語って、そがえ上手に植えられっこんだら、植えてみろ」
「ほんじゃ、おれ、植えてみっか」
「植えてみろ、まず」
みんなは縄張って、うしろさ下がって行くげんども、佐兵は縄も張んねで、真直に、チョポチョポチョポと植えて行く。そして早いし、一つも曲んねがったど。
田植えだらば、そがえ上手ななかったど。
一日手伝って、お振舞いにあずかって、そういう風な田植の名人だったって。

何仕事でも名人だったど。

（近　きよ）

（3）

田植になど行くどよ、さっさっさっと、こう田植えんのだど。佐兵ざぁ、何でも仕事の上手な人で…。

そして向うの畔さ行って、アンアン、アンアンと泣いでいんのだど。

「佐兵、なんで泣いっだ」

て言うずど。

「みんなみたいに曲げて植えらんねもの」

て泣く人だったけど。

（清野キヨ）

（4）

田植しったど。そしたらば、

「そんなめんどうくさいこと、してっことぁない」

て、そして雨降りに、自分が苗取りして、雨ざぁざぁ降って休みで、着るものもその当時何もなかったから…。そうすっど藁を編んで束にして、

「何しんべ、あんな大きい藁背負ってって、田畔さ持って行って…」

そしたどころぁ、ミノの代りに着て、稼いでいっかったど。五反も植えっかったど。ミノ着ったまんま苗取りして、蓑の藁を一本一本抜いて束にして、たばねたど。

（吉田　広）

（5）

ある部落さ、仕事ぁうんと上手だったもんだから、「佐兵、おれさ田植助けねか」て。

「駄目だ、おれ、一人前はさんねげんども、人並ぁいられんねべし、お宅さだら行ってみんべ」

て、こう言うて、ボロ着物きて行ったらしいんだな。そうすっど、二はかばかり植えたそうだ。小さい田んぼ、そうすっど頓智なもんだから、手ぁ悪れの、足ぁ

悪れのて、一はかばり、人並みに植えないでしまったんだな。そうすっど頓智なもんだから、

「いや、おれぁ田植下手でわかんない、やめて行くべはぁ」

「田植では、お宅さ来ても、手間ももらわんねし…」

「いやいや、そうやねで来て、ついでに植えてけろ」

「そんじゃらば、植えて見っか」

て、三はか目に、こんどは鉢巻きして植えたど。そうしたところぁ、約十五メートルも植えたど。そうしたところぁ、いや、すばらしい田植は上手だったど。そうすっど一人十メートルばり早く上がって、自分が田植したとこ見っだけぁ、

「へぇ、おれは、なして田植下手なもんだべな、下手だげんど、さっとしてこうしたもんだ」

そしたら、五六人は魂消たど。上手でよ。

「佐兵、こつなしで下手だなて言うげんども、大変上手なもんだな」

「おらだ、さっとしてこういうもんだ」

なんて、そういうもんだど。

（渡辺金五郎）

（6）

佐兵が、他人の田植だったどこさ来てよ。そうしてワァンワァンて泣いでるというもんだど。そうしっど、田植しった人、

「なんだ、この野郎、他人の田植さ来て、泣いだりして…」

て言うたど。

「いや、みんな、曲げて植えっけんども、おれ植えで、曲げらんね」

て、そのくらい腕ええくらいだったど。

（安部茂次）

6　彪の皮の屋根

（1）

そして、こんどは、

「おれ、とんでもない珍らしいもの見てきた」

佐兵のごんだから、また小馬鹿にしに来た、誰もあしょらうなと言うたげんども、

「とんな珍らしいもんだ、とっても見らんねもんだぜ」

「何だ」

「あの、彪の皮で屋根葺いだところ見てきたぜ」

「彪の皮なて、虎の皮だの彪の皮だって、ほがえな、熊の皮も敷かんねに、彪の皮、屋根さ葺いたなんて、あんめぇちゃえ」

「どこだ、」

「宮内だ」
　また佐兵は人馬鹿にしてはぁ、小馬鹿にする。はつけなこと行ってらんね。なんて藁仕事しったんだって。そのうちの若い者ぁ、まずあしょらって、
「ほんじゃ、そがな珍らしいものなら、おれぁ行って見んべ、もし無いがったら佐兵、酒買うか」
「あまりええ」
「嘘だったら、酒十五杯、佐兵が嘘こいだら、十五杯、もしあったら、おらだは十五杯、ほんじゃ酒の賭しんべ」
　そして、若衆は仕事やめて、宮内さ行ったんだど。一日がかり掛っこではぁ、そして六角町あたりさ行ったらば、俵が一枚、屋根さ上がっていたど。そこ突(つ)ん抜けて行って、ずうっとあちこち皆見て、熊野さまあたりまで町中見たげんども彪の皮など、さっぱりない。
「んだから、彪の皮なて、ありっこないのだず」
「佐兵なて、こういうことばり語んのだから、馬鹿にさって来たんだから、おら

だ酒飲むばりだからええ」

なんて、若衆は笑い笑い来たんだど。そしたら家さ来て、佐兵は待ってだ。

「なじょだった」

「なんだ、佐兵。ほがえな彪の皮なんて、あんめぇちゃえ、どこにもないけなぁ」

「六角町にないけがぁ」

「六角町には米俵一枚上げっだどこあっけなぁ」

「そいつよ」

「人馬鹿にした、この野郎、ほに…」

「ほんじゃて、お前、米なじょに勘定する」

「おれぁ、米一俵、二俵って勘定する」

「米抜いでしまったもんだもの、俵（彪）の皮だべちゃ」

とうとう文句言うたげんども、酒買わせらっで飲まっだど。

（近　きよ）

（2）

あるとき、宮内さ行ったそうだ。そして宮内さ行ってみたそうだ。そして家のあたりさ来て、

「おれ、大したもの見てきた」

て言うわけだ。

「何だ、佐兵。大したものなて、何見てきた、こりゃ、にしゃ」

「彪の皮で屋根葺いていたの見てきた」

「なんだ、この野郎、ここらで彪の皮なて、あんめぇちゃえ」

て言うたど。

「んだたて、おれ、彪の皮、宮内で見てきた」

そして何だと思ったところが、俵ほごして、俵は一俵、二俵と勘定すんべ、その俵（彪）の皮だものな。

（安部茂次）

7　煮たった湯を飲む

佐兵が、
「がらがらと煮立った湯、飲みよう知ってる」
て言うので、
「なじょして飲むのだ」
「こげなもの、何でもない。飲まれるもんだ」
「んじゃ、教えろ。その飲む秘伝教えろ」
「じゃ、貴様、酒一升買え、教えっから」
相手は手品使いにでもなれるもんだと思って、酒一升買って佐兵さ飲ませたど。
「さぁ、なじょして飲むごんだ」
「なぁに、喉など焼けたば焼けるほど、かまわず飲まんなねごで」
て、ただ酒、一升飲まってしまったど。

（高橋照太郎）

8　苗の逆さ植え

むかしはよ、煙草におにぎりなど出したそうだ。田植のとき。すっどそのおにぎり食せねど、稲逆さに植える人だったど。佐兵ざぁ。

「なんだ、稲逆さに植えで…」

て言うど、

「御飯（おまま）食ね人したようだと言うこと、あっどれなぁ…」

て、佐兵に言われるもんだけど。

（清野キヨ）

9　二十才（はたち）が出た

（1）

文殊山さ稼ぎに来てて、お月さま、お出やったどき、
「ありゃ、東の山から二十才（はたち）が出た、二十才ぁ出た」
むかしは暗くなるまで稼いだもんだからな。みんな魂消て、
「なにだごど、二十才が出たざぁ」
「見ろまず、あれあれ」
「なんだ、お月さまだどら…」
「んだて、おぼこださぁ、〈十三・七つ〉て言うどら。十三さ七つ足したら、二十才だべちゃぇ、めんどうくさいから、おらぁ、二十才て言うた」
て。こういうことばっかり語って、人馬鹿にして歩いっだって。

（近　きよ）

（2）

頼まって畑うないして、畑ぁちょっと遅くなったげんども、遠いどこなもんだから、終(おや)して行く勘定で遅くまで稼いで来たていうんだな。そしたところぁ、お月さま出たの見て、

「姉さ、二十才ぁ出た、二十才ぁ出た」

て言うもんだずもな。

「何だ、佐兵兄(あ)んにゃ、二十才ぁ出た、二十才ぁ出たて、薄気味悪いこと語んな」

て言うた。ちょっと暗くなったもんだから、

「十三、七つで二十才だごで…」

て、お月さま出たから〈こだい遅くまで稼がせて〉て言うわけだな。

（安部茂次）

10　十一毛の猫

「三毛猫ぁいるし、んだげんども、おれぁ十一毛の猫見たことある」
「また、馬鹿なことばっかり語っている。十一毛なていう猫、あんめぇちゃぇ」
「いた」
「なじょな猫だごど」
「佐兵は、そがな猫いたな見たことあっか」
「ある」
「なじょな猫だごど」
「毛は焼けた猫だも、焼けぱたしたもんだも、八毛で、三毛足したら十一毛だべちゃはぁ」
そだなごどばり語ってたもんだど。

（近　きよ）

11　煙草の虫取り

上長井笹野は有名な笹野観音の鎮座で名高いところ、西は屏風を立てたような笹野山、前は田圃広けたところ。また畑も沢山あるので、昔から煙草を作り、煙草の産地として名高い。この笹野に強慾な親爺があった。土地も沢山所有し、笹野では屈指の地主であった。この親爺、小作米は高くとる、奉公人は酷に使うというので、人々は毛虫のように嫌っていた。

この家では沢山の人を使って煙草を作っていた。この煙草が成長するにつれて害虫が発生する。連日沢山の虫をとっても、とっても発生する。この害虫のため少しでも怠ると、せっかくの苦心も水の泡になる。

で、虫取りの時期がくると、朝から夕方まで、せっせと取っても取り切れない。ちょうど佐兵次さんが笹野へやってきた。そうかそういう家なら、少しの間手伝って行こう、早速その家へやって来た。手不足で困っていた時のこととて、

「佐兵次さん、よくやって来て呉れた。では御馳走は、いまにするから、まず煙

草畑へ行ってくれ」
「はい」
と、二つ返事で、煙草畑へ行く、虫を取るかと思いの外、煙草畑のところへミノを敷いて一寝入り、そして昼になったので、ノコノコやってくる。午後からも同じ夏の日、カンカンと照りつける日も西山へ入る頃家へやって来る。喜んだのはこの家の主人、
「よくとって呉れた。疲れたろうから一つやって呉れ」
と、酒を出す。酔が廻ってくるにつれ、主人は、
「どうだ、佐兵次さんや、虫をいくらとって呉れたかね」
と聞けば、平気な佐兵次、
「旦那さんや、煙草畑へ行って寝てきたよ」
むっつりした主人、
「どうしたえ、虫取ってくれなかったかえ」
「何、旦那さんは煙草畑へ行ってくれというので、行ってだけは来たが、寝なが

ら虫の上り下り、なかなか面白かったよ」
と。あいた口がふさがらない。
「では、佐兵次さんや、この虫を川原に投げてきてくれ」
と。傍を見れば、朝から五六人の若衆がとった虫は、ハケゴに山のよう。それを小脇にかかえて川原へと行く。そしてハケゴのまま川へと投げ入れてしまった。帰って右の話を主人にすると、再び開いた口はふさがらなかった。

（「つゆふじの伝説」）

12　嶋蔵さんと謎問答

むかし、佐兵という、おどけたことばっかり評釈きりで、他人（ひと）魂消らがしてばり話語る人だったど。そしてこの片目の嶋蔵さんという人は、これは学者だったど。そしてここさ、とうし佐兵があっちゃ廻り、こっちゃ廻りして歩いたもんだ

からな、どこで飯食って歩くなんてないもんだから、そこさ泊ったど。
「ほんじゃ、今夜、佐兵まず謎ときすんべ」
て言うたら、
「ほんじゃら、おれから謎とっか」
「ええから、ほんじゃらば、佐兵とかけて何と解く」
て言うた。佐兵もなんぼ考えても考えらんねがったど。そうすっど嶋蔵という人が、
「おれ解いてやる。佐兵とかけて、タムシと解く、そのこころは『ぐりぐり廻ってくる』」
そうすっど、家内中が大笑いしたんだど。
「親方、ほんじゃ、こんどおれが謎かけんべ。嶋蔵親方とかけて何と解く」
その学者の親方もちょっと分んねがったど。
「御祝儀の盃と解く」
みんなだ、ちょっと分んねがった。御祝儀の盃なんて言わっでな。佐兵はまず

返報がえしすんなだから、何て言うんだか、と親方も待っていたど。

「そのこころは…」て聞いた。「そのこころは『一生のかため』」

んだげんども、苦虫つぶしたような顔面したげんども、何とも仕方なくて、

「今夜ばりはぁ、貴様に負けた」

て、カブト脱いだど。

（近　きよ）

13　しらみ五升質入れ

佐兵じゃ、うんとシラミたかりだったど。そしてまず、みんなだ冬になっても寒い姿してるもんだから、むごさいと思って、胴服呉っじゃりすんのだど。そがえしてもらった時には、着っけんども行き会った人が自分より寒そうな格好していっど、片端から脱いで着せんのだど。ほだからいつでも体さ喰付いていないど。

衣裳な。自分も喜び、他人も喜びさせて、自分も寒がっていっけんども、そういう人であったんだど。

あるとき、入生田の金持の家から新しい綿入れもらったもんだから、酒大好きなもんだから、質屋さもって行って、酒代拵えに行ったんだど。そうすっど、シラミたかり知ってるもんだから、番頭、

「佐兵の綿入れでは、シラミもいたべなぁ」

「いた、シラミ…」

「んじゃ、シラミがらみ置くのがはぁ」

「んだ、シラミがらみ置いで呉ろはぁ」

「ほんじゃ、なんぼと書いたらええがんべ」

「シラミ、五升とでも書いて呉ろはぁ」

質札さ、綿入れ一つとシラミ五升と書いだんだど。そして行って、佐兵、何考えて行ったかも知らねで、笑っていたど。そしたば間もなく、佐兵が来て番頭さんさ、

「質受けて行くべはぁ」
「早いなぁ、佐兵」
「んだ、寒いから」
なて、ほしてこんど持って来て、質札と交換すっどき、佐兵は、
「なんだまず、おれぁ質に置いたの足んね」
「何足んね、まず」
「ほう、ここさ書かっていたべ。シラミ五升と、そいつもらって行かんなね」
「なんだ佐兵。シラミ五升なんて、そいつぁおどけだったどら」
「おどけであんまい、ここさ書かってだもの、もらって行かんなね」
やんやん、やんやんて、店先で言うもんだから、旦那、またこりゃ佐兵にやらっじゃんだと思ってはぁ、出てきて、番頭と二人喧嘩などしているもんだからなぁ、
「佐兵にはまいったんだ。まいった。まいった。佐兵にやらっじゃんだ。まず仕方ない。んじゃ、酒代であやまって、シラミいなくなったんだから、こっちからシラミ買うがらはぁ、売って呉ろはぁ」

て、シラミ代払ったんだって…。

（近　きよ）

14　三味線をひきずる

（1）

佐兵は、とうしそこら中歩いているうちに、あるところで三味線ひいでるとこにぶっつかったんだど、そうすっど、

「あの三味、上手だなぁ」

て、みな感服して聞いっだど。佐兵も聞いでで、

「おれもひかれる、三味」

て言うたど。

「なんだまず、おれひかれるなて、佐兵、三味ひいたなて聞いたことないな」

「ほだたて、三味ぐらい誰だってひかれんべちゃえ」
「ほんじゃ、ひかれんながい」
「ほだ、おれなど、上手にひかれる」
「ほんじゃらば、ひいてみせろ」
て、こう言わっだど。そして、
「持ってきてみろ、三味ひいてみせっから…」
まさか引ずっどなど思わねから、持ってきたど。そしたば、三味の棹さ縄つけて、「ええか、ひくぞ、ええか、ひくぞ」
て、こう引っぱってガラガラ、ガラガラと引っぱったど。引っぱられっど思わねもんだからよ。そしてはぁ、三味みなぼじょごしてしまったど。ほだげんど誰も三味ぼこした、悪いとは言わんねでしまったど。なんぼ怒らっでも、佐兵は、
「おら、ひけというから引いたんだ。こいつだって引くのだべ」
とうとう三味一丁、ぼっこさっだど。

（近　きよ）

（2）

ブリキカンを道路、ジャガラン、ジャガランて引張って歩ったそうだ。下の部落衆は、また佐兵だなと思っていたんだど。

部落の人もちょいちょいと芸者買いとか、遊びごとあったげんども、大抵おれは芸者買いするようなことは嫌いだから、道路かまわず引張って歩(ある)って、三味線鳴らす代り、ブリキカン引きずって一週間ばかり、毎朝げ続けて歩いっだんだな。そうすっど、部落衆知ってるもんだから、

「ああ、また佐兵は頓智のええのだげんど、またカン引張って来たぜはぁ」

「ありゃ、一つの趣味だ。おれぁ個人としての趣味で、芸者買いに行かんねもんだから、おれぁこうして遊んでいんなだ」

て言うたど。

（渡辺金五郎）

15 植木売り

佐兵が松の木の格好のええのを切ってきて、土さ植えて鉢を持(たが)って行ったど。

旦那衆の家さ行って、

「植木持(も)した」

「なんぼ」「いやなぁに、なんぼなて、旦那のええほどで、ええごで。おれぁ、唯持って来たんだもの、値なしでええごではぁ」

そして、

「値なして言わっだって、せっかく掘って来たんだから…」

て、金を払ったずも。

ところが佐兵のもって来た植木は土にさしたばりだから、根っこないごんだ。

旦那のところに佐兵が次に来たときに、

「なえだ、まず佐兵、貴様、せんどころっと欺まして、根っこのない松の木持って来たどれ」

「ほだから、旦那、根なしでええと言うたどれ」
て言うたど。

（高橋照太郎）

16　桑　こ　き

佐兵来たど。
「旦那、桑持（も）した。買っておくやい」
「なんぼだ、桑」
「なんぼでもええごで、なぁに、ええようにええごで。おれぁ桑こき賃さえもらうとええなだ」
て、旦那に佐兵が言うたど。桑こき賃なんて、そんがえ安くさんねし、当り前に買ってやったど。そしたれば、次の日見たれば、自分（わ）の家の畠の桑こいていだっ

たど。
「なえだ。おれの家の桑こいて持って来たのんねが」
「んだから、桑こき賃さえもらえばええと言うたどれ」
て言い逃れたんだど。

（高橋照太郎）

17　えじこ作り

（1）

えじこというものは、赤ん坊出っじど、えじこざぁ、むかし作ったもんだべ。そのえじこざぁ、一日に拵え上げなねのだど。ほだから、普通の人ぁ、朝暗いうちから藁打って、そうして夜遅くまでで作らんなねがった。
最初頼んだところぁ、午になっても遊んでいらって、困ったど。

「佐兵、まずなじょなもんだず。えじこ拵って呉るというけぁ、拵って呉んなか」
「拵う」
「今ごろから、拵われんなか」
「拵えしたらええがんべ」
「んだ、拵えさえしたらええんだ」
「んじゃ、拵えてやっから…」
「ほんとだべなぁ、人馬鹿にしたこと、しんまいなぁ、佐兵」
「心配すんな、まず」
そして作ったど。ちゃんと夕飯食れる前に、終ったど。
それなど、何きれいだったか…。

（近　きよ）

（2）

小佐家の安部今吉さんは八十九才でなくなった珍らしく長命な人だった。露藤の名物男佐兵次を知っていろいろな話をした。

同老、小野川の扇屋旅館に泊ったとき、露藤の佐兵次のことを聞いた。同人は「いぢこ」作りの名人で、よく頼まれると、喜んで飯も食わず作った。一日に二個を作ることも珍らしくなかったといわれる。機織りも上手で、機道具は自らこしらえたという。

（「つゆふじの伝説」）

18　酒の篦抜け

（1）

むかし、上杉さま領の頃、深沼・屋代さ行くど、御領だったから、高畠ではうんとゆるやかな御年貢だったど。米沢では少し餓死になっど、酒造んな、着るもの着んなとうんと厳しいもんであったど。

んだから、深沼の番所ではみな改めが厳しがったど。佐兵はこっちで酒造らん

ねどき、御領ではどんどん造っているもんだから、御領さ行って酒樽を持って来っど、とがめられっから、佐兵は、

「一つ、あの役人野郎べらさ、小便飲ませて呉れんべ」

どて、酒樽さ小便詰めて持ってきた。そうすっど、

「その樽、なえだ」

「小便だ」

「この野郎、嘘つかして、小便なんて樽さつめて背負って歩くめぇちゃえ、酒だべ」

「ほんなえ、小便だ」

役人が取っかえして、飲んでみたば、やっぱり小便だった。

「この野郎、太い野郎だ」

「ほだて、小便だて言うに聞かねで飲んだんだもの」

そうすっど、次から酒を詰めて背負って来るげんども、

「あの野郎、また小便飲ませられっど悪いから飲むな」

て、酒を持って来ても通したもんだど。

（高橋照太郎）

（2）

番所に、米沢から役人が来ているわけだ。そっから向うは御領、こっちは米沢領。向うからは酒だのぜいたく品がこっちさ流れる。そういうことはさせらんねごとになっている。そうすっどみんなだ、ええ酒欲しいもんだから、松川の頭（かしら）を来たり、いろいろ関所破りみたいに来たもんだげんど、佐兵ばりは、小便の澄んだとこ樽さ詰めて、そうすっど、

「なんだ佐兵、背中さ背負ってだもの、なんだ」

「こいつぁ、小便だ」

「何だ、小便、樽さ詰めて歩くものいたか」

「いや、小便だ」

「降してみろ」

その侍が、ちょっとさぐって飲んでみた。

「何よ、本当に小便だ」
「んだから、小便だて言うたどら…」
佐兵は有名なもんだから、戻したっても始まんね。
「馬鹿野郎にも程がある」
なて、おんつぁっだ。
それからざぁ、佐兵は毎日毎日、樽で今度は本当の酒運んだど。

（近　きよ）

（3）

ここ、むかし、上杉領と屋代郷は御領で、こっちは私領だった。そいつでそれ、上杉さまの方がおつめになったべ。そんで着るもんから何から、すっかり差別さっじゃわけだったべ。
奢っては駄目だ。奢んなと奢侈を止めらっじゃということだべな。
そん時、向うの御領の方では酒も飲まれるし、着物だってみな着るも着られっかったげんども、私領の方は木綿以上のものは着ては駄目だということ、禁じらっ

じゃもんだど。それから酒だって飲まんねし。そん時、その御領の方さ行って酒もらって来なければ、飲まんねわけだから、そこだって役人に見つけらんねようにして忍んで行かんなねわけだもな。ここの部落抜けて、向うの屋代さ行くどこに橋あったもんだっす。そこ番所というもんだ。

あるとき、大きな桶背負って、佐兵がよ、桶の中に小便入っで、背負って来たずなごでな。そうすっど、

「誰だ」

「はい、佐兵でございます」

「何背負って来た」

「小便だ」

「小便でないべ、酒だべ」

「酒でほんね、小便だ。そがえに疑(うた)ぐっこんだら、開けてみっか」

して、開けたというごんだ。やっぱり小便だったわけだ。んだげんど、色はちょっと似てんべ、ほだから、

「飲んでみろ」
て言わっだど。
「おら酒嫌いだし、そいつぁ小便だから」
て言うて、役人に飲ませたど。小便だもんだから、役人だも困ったごでな。そしてこんどは本当の酒背負って来たのよっし。そしてその手でまたとがめらっじゃごで。そうすっど、
「今日は酒だ」
「酒でないべ、小便だべ」
「酒だずば」
て言うげんど、本気にすねごで。
「ええ、通って行け」
て言わっで、そこ無難に通って来たど。…という話。

（川井宝衛）

（4）

ここは御領と私領だから、和田の御領の方から行ったもんだったんだな。佐兵というのは…。糠野目の番所あって、酒は私領にはなかったんだずもな。「酒欲しい、酒欲しい」て言うもんだから、酒持って行ったそうだ。そうすっど酒持って行って、番所通って行くには、ただもの持って行かんねがった。

「一つ、小便で誤魔化してやろう」

て、誤魔化して、

「この前、佐兵小便だった。また今日も佐兵小便ずうもんだべな」

て、五六人の人で見っど、やっぱり小便であったどなぁ、そして、

「これは、ただ者でない、馬鹿だ」

て、関わねがったど。そしてかまわんねもんだから、三回目、四回目に本当の酒を背負って、ダンボさつめて行ったんだな。そうすっど、

「あんな者は、なんぼ行ったて、馬鹿だから、かまわねんだ」

て、そして何回とも酒を背負って、懐こやしていたけど。

（渡辺金五郎）

（5）

ここは上杉扱いでないから、酒は造らっじゃんだな。私領て言えば、糠野目の方、あっちは造ってなんねがったど。そうすっど、佐兵は何を考えたもんだか、商人して食うど思って考えたもんだか、新しい小便桶ゆずってもらって、まいどはダンボというのだったな。それ作ってもらって、それさ小便汲んで行ったわけよ。そうすっど、お役人、

「なんだ、佐兵、どさ行ぐ」

て言うた。

「おれ、小便汲みしったんで」

「おいこら、テンツ野郎だ、にしゃ、お役人をだまして通して、酒売りに行くなだべ、下(おろ)してみろ」

て言うわけよ。

「小便だず、お役人さま」

聞かねわけだ。

「汚ないから、触んねでもらいたい」
て言うわけよ。
「いや、にしゃ、テンツだから、下してみろ」
そしてまず、お役人にかなわねんだから、お役人が飲むまいげんど、口あたりまでやってみたれば、小便だど。そしたら二度目から、
「何もって来た」
て言うど、
「小便だ」
て言うど、お役人が、
「おろして見ろ」
て言わねがったど。二度目から本当の酒もって行って売ったそうだもな。人相というものは馬鹿面(づら)してっかったそうだもな。佐兵は…。んだげんども、とぼけたこと語って明るいがったずもな。

（安部茂次）

19　ローソクを持ち出す

（1）

米沢藩では、ローソクはやたらに他領に出さねことにしていたど。佐兵はお番所を通るとき、大きいお茶箱さ、こげなちっちゃなローソクの破片一つ入って来たずま。

「これ佐兵、何背負ってきた」

「ローソクだ」

「ローソクは持って行っては駄目だ。開けてみろ」

て言わって、開けてみたところが、箱の中に、こげなちっちゃなローソクの破片一つしか入っていなかったど。

「はつけなもの、差支えないから、早く持って行け」

て言われた。その次はぎっしりいっぱい持ってきて、

「ローソク持って来た」

て言うど、
「ああ、佐兵ローソクだら、ええ」
て言うた。それから佐兵はローソクをかまわず持って行かれっかったど。

（川井弥右ヱ門）

（2）

私領では、ヨリで頭結っては悪いがったずも。それぐらいなもんだから、ローソクなの灯（あか）さんねだに…。大きい箱さ持って行って、
「何持（も）した。佐兵」
「ローソクだ」
大きい箱さローソクの欠け、こげな小っちゃな入っで、
「こいつだって、ローソクだ」
こんど、
「何もって来た、佐兵」
て言うど、

「にしや、テンツ野郎だから行け」
て、こう言われっかったど。そん時、でっつり背負って行って売ったもんだったど。

（安部茂次）

20　米　を　運　ぶ

（1）

むかしは、お蔵米というやつ、仙台の殿さまさ米を差上げるお蔵米という奴があったった。御年貢だな。その御年貢米なるものが今の高畠の場所場所があって、宿々から伝わって白石さ行ったのよな。

そん時、峠を越すど米を背負って商いをすることができねがったど。そんで商いをしたものは、佐兵以外にはなかったど。こういうわけだ。佐兵がどうしても

その米を背負って二井宿峠を越えて、七ヶ宿さ行ってとがめられる。
「何だ、箱を背負って通る。何入っている」
「穀物だ」
「穀物を背負って歩(ある)ってはならないことになっていんなだから、それを承知で背負って来たなが」
て言うたら、
「承知で背負ってきた」
「取調べるから来い」
て言うて開けてみたところが、オムスビだというわけだ。ムスビが出てきた。
「ムスビでないか」
て言うたら、
「これ、穀物の一つだ。お役人が、何が入っているというから、これ穀物だていうて、何悪いわけでない、ムスビだって穀物だ」
「小馬鹿くさい、通れ通れ、関所を通れ」

何でも三回ぐらい続けてやったということだど。二・三回取調べをしたげんどやっぱりそのムスビを持って、

「おれ、商人（あきんど）で買い出しに行くんだから、弁当入っているんだ。穀物、間違いない」

て申訳出きるわけよ。それからこんど、

「駄目だ、これぁ調べだって分んね、捨ておけ、捨ておけ」

て言うわけで、役人、見ないふりして…。

「さぁ、こんどは本気になって米背負い…」

白米などどんどん商いしたど。そういう話があるど。

（今井勇雄）

（2）

むかし、上杉さまの時代、露藤から酒を運ぶについて、どうしたらええかということ考えだんだ。そして組んで背負って十日も背負ったというんだな。仙台さ越えて、それからまた背負って来たて言うんだな。やがて役人は始めて蓋取った

ど。何べん蓋取らせても、小便つけてなもんだから、
「酒、酒、そっちゃ持って行げ、そんなもって来んな」
て、馬鹿と見らっじゃもんだど。そして酒を一生懸命に運んだど。
それからこんど、米運んでやりましょうと、その米を運ぶには、どうして運んだらええかて、お役人の目ごまかすにはどうしたらええかて、考えた。糠詰めて背負って行ったど。そしてわらわら逃げて、観音岩（高畠町二井宿）に登って、そして糠二俵にして背負ったど。
「そしたら、この野郎、佐兵、待ってろ、待ってろ」
て言うげんども、糠だから追かけらんね。そしてとうとう押えらっで、こんどみんな掛りして六人もかかって先廻りして、押えらっだら、糠だった。そうして何べんも糠だったど。そしてこんど、
「あいつぁ馬鹿だ、かまうな」
とはぁ、こういう風になったものよ。そして米を一生懸命に運んだど。それから米を運ぶことしたり、醤油を運んだりしたということだ。

ある日、お天気のええ日、清水のどこで、のたばって米二俵背負って水飲みしったど。

「あらららら、この人は死んでだ」

て言うたら、そしたらば、

「何もし」

て、むくっと起きて立ったど。それくらい力がある人だったど。そして小便すっどきは、米背負ったまんまだったど。

（吉田　広）

21　役人の頭を打つ

佐兵次さんは機織りを教えたということは有名な話。

当時の露藤の女子衆は佐兵次さんに教えられたといわれる。また泉岡村の七郎

右ヱ門さんの内儀さんも佐兵次さんに機織りを教えられたという。当時尾長島で阿妙陀寺の尼さんが殺された。朝になってこれを見つけ大騒ぎとなった。役人出張して調べたところ、現場に天保銭六七枚散らばっていた。また寺の前の小川に火箱が入っておった。それへ露藤村佐兵と記してあった。嫌疑がすぐ佐兵にかかってすぐ捕った。しかし佐兵次は連日日記をつけておいた。その日記によると、その晩は寺へ泊らなかった。名主の名左ヱ門さんが奉行所に出頭して、佐兵次は人を殺すような者でないと証明したので、許されて帰った。

佐兵次は露藤の某と賭をした。白昼米沢の藩の役人の頭を打たれるかと。佐兵次は笑いながら、己なら何の造作もないと相手の某も驚いた。その結果佐兵次は役人の頭を打つこと、もし打ったら金百疋と酒十杯買うこと、もし負けたら某の言うことは何でも聞くことという約束であった。そして今日、二人同道して佐兵次さんは打つ、某人は見届け役であった。某もまさか役人の頭は打たれまい、今日こそ佐兵次の高慢の鼻をへし折ってやろうと、米沢の城下にやって来た。折から通りかかった役人二人、店へ買物に入った。そこへづかづかやって来た佐兵次

さん、一人の役人の頭をいきなり拳で一つ、相手の男はおどろいて、どうなることやら、息をのんでみておった。すると佐兵次、道へやってきて馬糞をつかんで食おうとしたところ、最前の武士は何者かと怒鳴ったが、見れば一人の男、今馬糞を食っている。てっきり狂人と思ったのであった。馬鹿かと笑いながら去った。某も今更ながらおどろいたのであった。こんな頓智をして、相手をおどろかしたのであった。

（「つゆふじの伝説」）

22　旦那に行きたくない金

（1）

あるとき、鰉屋さ佐兵が稼ぎに行ったど。そして給金もらうときになったれば、その鰉屋の旦那が金出して、

「銭、銭、佐兵のどこさ行きたいか、行きたくないか。行きたくない？ほんじゃこの次だごで」
て言って、馬鹿にされて銭もらわんねがったど。
「ほんじゃ、仕様ないごでな」
て、戻って来たずま。それから時過ぎてから、その鰈屋さ佐兵が行って、
「今日は御祝儀の特別の注文の魚だほで、おれの言うように切って呉ろ」
ていうことで、とんでもない形のものばり切らせたもんだど。そして、
「なんぼになんべ」
て、佐兵から言われて鰈屋の旦那、勘定して、
「この勘定はこうだ」
て言うど、佐兵は財布を出して、
「銭、銭、旦那どこさ行きたいか、行きたくないか、なに、行きたくない？ほんじゃこの次だごではぁ」
佐兵に仇とらっじゃずま。

（川井弥右ヱ門）

（2）

むかし、鱒だの塩引だの生鱒なの、珍らしくて買わんねから、魚屋の前通っど、こうして見る人いっぱいいたんだど。佐兵も見っだのだど。そして佐兵は、こうして見て、あまり珍らしいがって見るもんだから、その魚屋の旦那が、

「佐兵、佐兵、そがえに珍らしいか」

「珍らしい、珍らしい」

「食ってみたくないか」

「食ってみたい」

「買わねが」

「高くて買わんねもの」

「佐兵だから、余の人でないから、五文にまけんべ」

て言うたど。そうすっど、喜んで五文にまけんべと言うもんだから、まさか銭持っていたと思わねも、ボロ衣裳ばり着て歩っからなあ。ふところから出したど。

「はい、五文」
て。そうしたらば鰉屋、いたましくなって、
「ほんじゃ、佐兵、ちょっと待ってろ、まず」
そして、その魚さ行って、
「鱒、鱒、まず佐兵さ買わっで行んか、行かねか、行かね？行かね…佐兵、悪いごんだげんども、こんどの切り魚、佐兵どこさ行かねて言うぜ、仕方ないから今度の次まで待ってで呉ろはぁ、こいつは分んねなぁ、こりゃ」
「んだか」
て、佐兵は五文の銭持って戻ったって。そしてこんどすばらしい若衆の振舞いの注文受け取って持って行った。そしてどっしり整わせて取りに行った。そして、
「その銭、なんぼだ」
「なんぼ、なんぼだ」
その銭、ぞろっと出したど。そしてその旦那が銭とる気になったど。
「旦那、ちぇっと銭に用がある。銭、銭、鰉屋さ行んか、なじょだ。銭なじょだ。

行かね？銭が行かねて言うぜ。銭」
て、銭ガラッと持って来て、返報がえしさっだど。まず佐兵は狐みたいに返報がえしのしねぇことざぁないがったど。

（近　きよ）

（3）

銅屋町あたりででもあったべぇ話よ。まず。そして魚の注文したそうだ。魚切ったげんども、それ、身成り悪がったがらだか、
「魚、行んか行かねが…」
て言うたそうだ。
「行かねか、佐兵兄（あ）んにやどこさ行かねか」
て止めたそうだ。そしてこんどぁ、忘（わ）せた頃行ったそうだ。魚いっぱい切らせてよ、三角だの四角だの、いっぱい切らせたど。そうすっど銭出して、
「銭こ、行んか、行かねか」
て言うたど。

「はぁ？行かねど」
て、仇（かたき）とりしたど。佐兵にかたきとらっだど。

（黒田てつの）

（4）

結婚式、佐兵の部落であったそうだ。
「結婚式には、魚買いに行んごんだれば、おれどこやってくんねぇか」
て、佐兵はこつなしなもんだから、行ったそうだ。最初はボロ着物きて行ったらしいんだな、行ったのは、和田に名取屋という大きな鰊屋あったそうだ。「こんにちは」て、鰊屋に行ったそうだ。そうすっど二品三品そろえてから、番頭は、
「佐兵、あんまりボロ着物きてで、金持ってたが」
て言うたど。
「へぇ、ボロ着物きてっど、金持たねと見てんのか、おれぁボロ着物きてっから」
「金もたねて言うんなら、売らんね」
こう言うように、番頭さん言うたそうだ。

「売らんねごんだら、おれぁ、今日帰るはぁ、売らんねもの欲しいざぁないから」
そして買物半端にして帰って来たど。こんど一週間ぐらいしてまた行ったらしいんだな。こんどはまずええ着物きて行ったど。「こんにちわ」。こんどはいま一ぺん、服装悪いがら買わんねがったこれ、ええ着物きて行ったんだど。そうして鯉から刺身から一切結婚式用のお魚全部そろえて切ってから、
「こんどはできました、佐兵さん」
て、番頭に言わっでから、
「できたか、勘定」
て、札整えてやるとき、札さ、
「お前、ここさ、おれ魚買ったから、行んか、行かねか」
て、札に聞いたど。
「いや、鰉屋の番頭さん、札に聞くど、銭はここさ行かないという、行かないと言うごんだら、これは、札は行かないというんだから、おれは放すこと出来ないんだ。こんじゃ駄目だ」

て、魚全部みんな切ってから、そう言うて買わねで来たど。そうすっど鰊屋はとんな目に合ったど。かたき取らっだんだど。

（渡辺金五郎）

（5）

高畠さ、魚買いに行ったど。そうすっど、ボーロク衣裳着ったったどな。そしたれば、「魚呉ろ」て切らせて、その番頭が悪いんだもの、いっぱい切って佐兵が銭出したれば、

「ちょっと待って、魚に聞いてみっから、魚、魚、佐兵どさ行(い)んか、行かねか」

て言うたら、

「佐兵どこさ、こりゃ行きたくないてだものなぁ、佐兵」

て、売ってよこさねてだものな。

「そうが…」

て来たもんだそうだ。佐兵は、よっぽど経ってから、ほとぼり覚めてから、こんどぁ立派な衣裳着て、旦那は、

「佐兵なんだ。いつもよりええ衣裳着てきたな」
「いや、今日は旦那どこの御祝儀で魚いっぱい買ってこいというもんだから、おれぁ魚買いに来た」
て、こう言うわけだ。
「ほうか、ほんじゃらば、佐兵、いっぱい買ってって呉ろ」
て、さまざまな刺身だて切らせてよ、そしてまず、佐兵ぁ、出た頃みな整った頃銭出して、
「ああ、銭、銭、この鰉さ行んか、行かねか」
て聞いたごんだずもな。
「何だか、こりゃ行きたくないていう、今日は…」
て、そしてはぁ、やめらっでしまったど。さんざん切らせらっで…。

（安部茂次）

23　菓子の只食い

ある日、行ったら、砂糖樽いじり廻しったの見て、佐兵は砂糖大好きなもんだから、見っだんだど。

「なんだ、佐兵。いつまで見ていっこんだことなぁ」

「おれぁ、砂糖大好きなもんだからよ」

「百匁ぐらい買って食ったらええがんべ」

「んだげんど、おれぁ百匁、二百匁で足んねもんだもなぁ」

「ほんじゃ、なんぼ食れっこんだ」

「食う気になっど、一樽も食れんなぁ」

「ほんじゃ、一樽食うごんだら、食ってみろ、呉れっから…。こいつ一樽食うごんだら呉れる」

て。

「ほんじゃ、食ってええか」

「ええ」
て。みんな街道通りも、家の人も、佐兵ぁ一樽砂糖なめっどこずから、みんな来てみろ。まずと家内中寄ってみたど。ほしたらば、まずうまそうに食って、
「今日は、こんでたくさんだはぁ」
て行ぐどこだど。そうすっどその旦那、
「ちょぇっと、待てまず、一樽食うどこの約束だ。樽食んねもの、首置いで行かんなねごで」
首置く約束だったど。
「おれ、今一ぺんに食うと言わねどら、一樽食れると言うたげんども、そがえに一ぺんに食うと言わねどら、んだから、明日も来て御馳走になるし、明後日も来て、御馳走になんのだ、さいなら」
て行くどこだど。そうすっど、
「ちょぇっと待てまず、おれも佐兵には参ったんだ、あやまった」
て、佐兵にあやまったど。

（近　きよ）

24　半　鐘　買　い

米沢さ半鐘買いに行ったというんだな、古金屋さ行ってよ。
「この風鈴が、なんぼする」
どかて聞いたそうだ。「二文」と言うたど。佐兵の姿見て、どうせ買わんねと見てよ。
「そら、二文」
どかて、ヒョイとかついだずも。そしたら二文て言うたもんだから、半鐘二文ざぁないに、仕方なかったど。

（安部茂次）

25　鰊屋が抜がっだ話

佐兵は藁仕事で売ってるもんだからな。高畠とか泉岡にな。注文して毎年カマス買うのだど。カマスは綴じて十枚にして持って行くのだど。そして持って行ったところぁ、鰊屋では馬鹿にする気なもんだから、こうして裏表十枚のうちのを見たど。

「佐兵、佐兵、こいつはええなだげんども、中端（なかはし）あって分んねなぁ、こりゃ」

「なあに？」

「中端あって、上ぁええげんども、中が不整いで分んねなぁ、こんじゃ分んね」

て、返したど。そうすっど、せっかく編んで来た、こいつで酒でも飲むべど思って行ったの、飲みっぽげだ。ほんでも、いっこうごしゃがねで、

「ほだか、ほんじゃ今度ぁ、ええの持って来っから」

て行ってしまったど。

そしてこんど、しばらくもよってから、魚買いに来た。塩引きな…。

「塩引頼まっじぇ、一匹切って二十人前切っておくやい。若衆に頼まって来たんだから」

二十切ったど。一匹の魚切ったのだから、頭の方も尻尾の方もあるわけだ。

「なんだこりゃ、頭の方と尻尾の方と、中の方どな、中端あるな、こりゃ。こんじゃおれもいらね」

て帰って来たど。鰊屋、むかしの魚、そう切らっじゃもんだから、とんな損したど。カマスどこでない。佐兵も行ってしまったから、そいつぁ売り呆けたど。

（近　きよ）

26　屋根葺と知恵くらべ

米沢から最上に通うに、赤湯から鳥上坂を越えて、中山から上山さ出る途中に川樋というどこある。川樋にも佐兵の知り合い居て、そこさ行ったときのことだ

ど。ちょうどその家で四人の屋根葺がいて、一人が風采あがらね佐兵を見て、一つからかってやんべど思って、

「やぁ、佐兵、お前はみなから、名人、上手だと言わっでいるげんども、どうだおらだの真似できっかい」

て言うたど。そうすっど佐兵は笑って、

「お前方も人なら、佐兵もんだ。お前方のすることなら、なんでも出来んべ」

「こいつぁ面白い、んだげんども、出来ねがったらどうする」

「そいつぁ、先手打ちだっだな。そんではもしおれが勝ったらどうする」

「よし、おれたちの一日の日当、みな呉れる」

「そうか、よし」

「だげんど、お前が出来ないときは…」

「お前たちの言う通りにするべ」

「待てよ、佐兵は無一文だから、毎日屋根葺手伝いしてもらうべ」

「ああ、ええがんべ」

て言うことになって、屋根葺の一人ぁ米俵ば横に背負って立ったど。すっど佐兵も二俵背負ってみせたど。そいつ見てた他の屋根葺は、

「そんじゃ、屋根葺で来い」

て言うもんで、するする屋根さ上って行ったど。そうすっど佐兵も後から登って、鋏をチョキチョキ使い、ヘラを使って屋根を葺いたど。そいつを見てて、舌巻いて、こんど、

「置賜の破風は台所の上さあったけがな」

て言うど、佐兵は、

「いや、台所と座敷の境さある」

て言うたど。そうすっどこんど、

「佐兵、屋根葺はいつでも高いとこで仕事するんだから、職人では屋根葺が一番だ」

て言うたど。そうすっど佐兵は、

「いやいや、随分自慢すっけんど、高い屋根におれば落ちる心配あるし、落ちた

ら死んでしまうべ」
て言うたど。そんで屋根葺は、
「佐兵、木を二つ合せれば、何だ」
て言うど、
「なんだ、そんなの何のことはない。林だべ」
「んじゃ、桜という字は何と読む」
佐兵はにやりと笑って、
「十八の女が二階の下にいる、だべ」
何尋ねてもすぐ答えるんで、屋根葺ぁとうとうカブト脱いだ。そして四人分の日当、二人分にまけてもらって、佐兵にあやまったど。

（近　きよ）

27　ソロバンの九九

ソロバンの稽古に、お弟子さをいっぱいとってだど。そうしたところぁ、その中に久七という人ざぁ、習っていだったど。ソロバンの九九を教える。

「キュウシチ、カカシチ…」

なて、佐兵教えるわけだ。

「なんだ、おれぁ名前、ソロバンの九九に教える。まずおれぁ名前出すことあんまぇ、先生、こつなしだな」

て、こんどソロバン置きすっどき、

「サヒョウイチ、サヒョウニ、サヒョウサン…」

て言うたじも、九九。そしたら、師匠にぶんなぐらっじゃしけ…。

（今井勇雄）

第二部　長手の伊佐

1　船坂新兵衛と長手の伊佐

坂口というとこに、船坂池という堤があって、そこに住んでいて、船坂新兵衛というあだ名をとった泥棒と、長手の伊佐という泥棒がいだったど。

この二人の泥棒が腕くらべということをしったのだな。いずれも二人は泥棒するだけでなしに、体も豪傑であったという話だ。

佐沢にある「船坂石」という三角石があるという話だ。その石を、とにかく長手まで、船坂新兵衛がかついで行って、長手さ置いてくる。長手伊佐が佐沢まで持ってくる。そしてまず体力の劣えないように、夜業（よわり）にかついで持って行ったり、持って来たりしていたど。

船坂新兵衛じゃ、堤を利用して、役人に追かけられたとき、

「新兵衛、いたべなぁ」

と、堤の小屋叩いて、

「ああ、おり申した」

と、軽く返事して、それ、召しとれと言うて家さ入ってみっど居ない。ざんぶと池さ入るんだそうだ。人間だもの、池さ入ったら、いつか出てくんべと思うげんども、なんと出てこない。葭をくわえて、そして水の中にくぐって葭で呼吸して、葭やらだから見付かるもんでないんだ。

「いや、早い野郎だなぁ」

と帰って行ぐじだ。役人に来られっど、いつでも返事していたもんだど。とにかく早くておさえどこぁない。

それから、長手の伊佐というのも、これは身の軽いもんで、すばらしいもんだったど。

倉さ、まず入る。入るとこりゃ長手の伊佐、ねらわっじゃ、よしきたというもんで、簞笥の中から銭出す。心得ある者は、むかしは武術というものがあったから、手を簞笥の抽出しさ手をかけたとき、切るというわけだ。姿見えなくなるというもんだ。忍術使いみたいなもんだ。夜のことでもあるし…。

「はてな、今、手ごたえがあった筈だ。いなくなっじゃ不思議だ」

天井さ喰っつき喰っつきしたど。クモみたいに…。一時のがれにな、そういう風に身の早いもんだったど。

そして、いつまでも天井さ喰っついて、クモのようにいっけんども、手から出来た血が立ったので、見つかったという話だな。

× ×

船坂新兵衛と共同してるようなもんだから、長手の伊佐が、早(はや)に召取らっじゃんだど。そんどき、やっぱりお堀のある米沢の家老か何かの相当ええお屋敷さ忍びこんでいたところが、船坂新兵衛は、

「どうも今日は、うまくない晩げだ」

と感じで分る。長手の伊佐に、「やめろい」と、こういう言い方した、「やめた」

「いや、おれはそんなもんじゃない、そんなこと、迷信にこだわっていらんね。おれは入る」

と、長手の伊佐が入って、そして腕を切らっじゃという。こういう話だ。

（今井勇雄）

2　馬場数衛宅へ新兵衛が入る

和田村に、豪族馬場数衛というのいたのよ。その家の破風は四間で、普通の家の二軒前あったというのよ。そこさよく忍び込んだもんだど。船坂新兵衛は…。

そして、破風さ上って隠っでいて、夜になっどいうど、下を見て、金のあっどこ見てっけんど。馬場数衛の豪族の家では、用意周到で、台所から座敷さ行くときは、必ず灯りを消したというのよ。三日も忍び込んでみたげんど、その動作は絶対に間違いないというのよ。どなたでも、どなたでも家族さ教えておくもんだから、金のあるどこさ行くときは、灯しを絶対に点けないこと、という家訓を置いていたらしい。三日三晩忍び込んだげんども、どうしても分んね。新兵衛だって、真の闇ではどこにどう金のあるもんだか分んねくて、下さ降りたど。三晩目に…。

「旦那、おれも、あっちこっち忍び込んでみたげんども、こっちの家ぐらいな用意周到な家見たことない、おれから降参する」

て、頭下げたという話よ。

（今井勇雄）

3　六尺の桶

むかし、上郷の長手に伊佐という大泥棒がおりました。石川五右ヱ門と肩を並べるほどの泥棒であったといっても、決していい過ぎではありません。そんな伊佐ですから、子どもの頃から、その腕白ぶりもかなりであったに違いありません。堪りかねた父がこらしめてやろうとして、伊佐が悪さをしたのを見て、六尺の桶に閉じ込めてしまったのです。六尺の桶といえば、そうです。あの酒屋で酒を造るときに使う大きな桶です。父は怒って、伊佐に怒鳴るのです。

「ここさ入って、よく考えてみろ」

びしんと大きな音を立てて、蔵の錠前が下ろされてしまったのです。きっと腕

白の伊佐の奴も、真暗い桶の中じゃ、そのうちに弱音をはいて泣き出すだろう、そうしたら悪さもしなくなるだろうと考えてのことでした。

一日経ちました。蔵の中は静かです。二日経ちました。蔵の中は物音一つしないのです。

三日目、父は少し心配になりました。一体どうしているんだろうと、こっそり蔵の中をのぞきに行ったのでした。するとどうです。伊佐は自分の帯をといて、結び目を作ってそれをひょいと桶のうちに引っかけて、するすると桶の上まで登ってくるのです。

「あっ、いけない、お母さんだと思ったら、お父さんだ」

と、伊佐は頭をかきながら、

「お父さん、ごめんなさい」

と言うのでした。全くすばしこい奴だと、父はにがわらいをしながら許してやったということです。

（船山健重）

4　名主どんの香炉

大泥棒といっても、困る人に施しをするというほどの心を持っていた伊佐ですから、ねらったものは、どうしたところで防ぎようがないというものです。

「おめえ、なんぼ盗みの名人でも、おれの目の前から盗めないだろうな」

名主どんは伊佐に言うのでした。

「さぁて、名主どんのものを盗もうとは思っても見ねぇが、盗んでくれというのなら、盗めぬものなんざ、何もねぇべな」

伊佐は名主どんの煙草を分けてもらって、こんな話をし合ったのでした。

「じゃ、三日のうちに、この香炉を盗んだら、お前にやるべぇ。だが盗めなかったら、お前さんの指をつめてもらうことにするよ」

今までの名主どんの意見も糠に釘、何とか真人間にもどしたいと考えてのことでした。

「こうなりゃ、二度と泥棒もできめぇ」

というのが名主どんの考えだったのです。さて、伊佐は帰って行った後、名主どんは金の香炉を部屋の真中に置いて、戸締りをして待っていました。夕方から降り始めた雨は夜に入っていよいよ強くなったようです。と、しばらくして外に人の気配がして、笠に当る雨の音が聞えて来たのです。

「奴さん来たな」

名主どんはすっかり眠気が覚めてしまったのです。

「こりゃ、いよいよ面白くなったぞ。きっと節孔からでも覗いているに違いない」

名主どんはコックリコックリした振りをしながら、実は耳をそばだてて、笠に当る雨の音を聞きながら、目は香炉の方をじっと見つめていたのです。

「奴さん、よぅく頑張るな」

香炉は行灯の光でまばゆいばかりに輝きます。とうとう屋根の棟も三寸さがり草木も眠る丑満時です。雨音もいくらか遠のいたようです。

「伊佐の奴、とうとう根負けしてしまったな。明日の晩に延ばしたんだろう」

と、名主どんは勝ち誇ったように声を出してから、

「うっかり言えねぇ、あの伊佐の奴のことだから、油断がならねぇ」

金の香炉がなくなったのは、その時のことだったのでしょう。全く伊佐という奴は手に負えないと、名主どんも、さすがにあきれ顔でつぶやくのでした。

5　偉　駄　天

むかし、印度という遠い国に羽根の生えた馬がいたそうです。天空を飛ぶように早いので、偉駄天というところだったのでしょう。この伊佐も全く偉駄天というところ。今日は福島、明日は米沢と、けちんぼの商人の屋敷にもぐり込んだと思うと、がみがみ屋の御役人の蔵の中にと盗みに入るのですから…。だから胸に笠を当てて歩いて行くと、その笠が胸にぴったり吸いついて落ちなかったほど早く歩いたということで、嘘かまことか、こんなたとえ話があります。

十里以上も離れた茂庭村や仙台領の白石の城下などにも、夜中にチョッコラ出

かけて、一仕事して来て、朝は仲間の奉公人と一緒に百姓仕事をしていたといいます。遠出をした朝は、いくらそっとしていても、奉公人たちには、うすうす知れるものと見え、朝起きると、タライに水を汲んで伊佐の前に置き、

「おい、ゆんべどこさ行って来た。これさ足を入れてみろ」

と差出すのです。にこにこうなずいて、タライに足を浸すと、水はジューンと音を立てて煮え立ったということです。

（安部忠内）

6　水　遁　の　術

町のけちんぼの商人の土蔵を破ったときのことです。知らせを受けた役人は、一目でこれが伊佐の仕業とわかり、彼の家をとり囲んだのは、一仕事終ってようやく伊佐が寝床に入った、寅の刻のことです。

その伊佐のことですから、右の目が眠っていても、左の目はカッと開いて見張っていたのでした。

「しまった、ばれたか」

と言いながら、彼は役人の囲みを破って、どんどん東の山をめざして逃げ出したのです。「それ逃してはならん」「御用、御用」と提灯が追って来ます。こうなっては行手は川にさえ切られ、その橋はぎっしり役人がつめかけています。もう一方の山が壁のようにさえ切っているのです。伊佐は大きな堤を前にして、どうしようかと考えているうちに、すぐうしろに迫った役人を振り切って、ドブーンと大堤の中に飛び込んだのです。

「馬鹿な奴め、こんなにたくさんの役人の中に、ポッカリ浮かんで来て、ずぶぬれになって捕まる格好は、伊佐らしくないぞ」

役人はもう伊佐を捕えたつもりになって、大堤を取り囲んだのでした。ところがどうでしょう。いつまで待っても浮かんでこないのです。湖面は小波一つ立たないのです。

「こりゃ、伊佐の奴、おぼれたかな」

夕方になって、役人も仕方なく帰ってしまいました。するとノコノコと堤から這い出して来たのは伊佐だったのです。

「なぁに、一日や二日は平気だよ、ガゴ葭(よし)の節を抜いて息をしてたんだ」

というのです。

（安部忠内）

7　吉兵衛さんと伊佐

長手小庄ヱ門の子、長手の伊佐は近来稀な大泥棒でした。でも金持から盗んだ金を貧しい人に分けてやるほどの心を持っていたのでした。その伊佐が吉兵衛さんに奉公していた時のことです。

「どうじゃ、伊佐、この次の間に長持があるが、長持の中にある品物を盗むこと

はできまい」

「旦那、わしらも、種のないことは何ともできませんが、ここで若衆二・三人で竹の節抜きをしてもらえれば、盗ることにしましょう」

ことともなげに伊佐がいうので、吉兵衛さんは、

「これは面白い、一つ盗れなかったら…」

と、伊佐の自慢の鼻をへし折って、真人間に返らせようと考えたのでした。吉兵衛さんは、早速若衆を呼んで、竹の節抜きをやらせながら、

「この長持の中から、ごっそり着物を、伊佐の奴が目の前で盗むっていうが、そんなことができる筈がない」

と、一人にこにこと笑っているのでした。ところが何時まで待っても伊佐はやって来そうにありません。景気をつけながら、若衆が竹の節を抜いているのを、長持に腰を下ろして眺めていた吉兵衛さんは、

「さすがの伊佐も、こう五人もの目のある部屋には入れまい。それにこんなに大きな錠は開けられないとあきらめたな」

といった時です。

「旦那さま、部屋においでです」

と、伊佐の声が廊下から聞こえてくるのです。

「ああ、どうした、伊佐」

伊佐は戸を開けて、大風呂敷を出すのでした。

「旦那さま、これが長持の品物でございますが、一枚だけ残しておきました。旦那さまの紋付だけは…」

びっくりした吉兵衛さんが錠をはずして長持を開けてみると、底がすっかりなくなってしまっているのです。

「竹の節抜きに合せて、縁の下から、鋸で長持の底を切ってしまいました」

と、伊佐がいうのは、さすがの吉兵衛さんも開いた口がふさがらなかったということです。

（安部忠内）

8 伊佐の最後

船坂の新兵衛といえば、これまた伊佐と肩を並べるほどの大泥棒でした。伊佐もちょくちょく新兵衛の所に行っては、お茶を飲むほどの仲だったのでした。

ある時、米沢の目明しが新兵衛の子分を捕えたのです。一計を案じて、

「やいやい、貴様のような悪党はひねりつぶしても足りない奴だ。獄門にするところだが、貴様が罪の恐ろしさを恥じる気持があるなら、考え直してやらぬでもない、その代り…」

と、何やらひそひそと耳打ちをするのでした。やがて親分の新兵衛のところにやって来て、

「親分、大した金が米沢の町内にあるから、一つ、親分、このわしが手引きいたしましょう」

と言うのでした。新兵衛はあまり気のりしなかったが、傍にいた伊佐に目をやると、伊佐も気がなさそうにしているのでした。

「あすこはな、警戒がきびしいでな、それに大した金もないと見てるがな」
と、新兵衛が言うのでした。
「親方が弱気になるなんて…」
という子分の言葉に、伊佐は、
「きびしい警戒に、新兵衛さんの弱気と聞くと、かえって血が騒ぐな」
と言って、こうまで言われてはと、とうとう伊佐は腰を上げたのです。その伊佐に押されて新兵衛も神輿を上げることにしたのでした。
「では早い方がいい、今晩はどうかな」
伊佐が口を入れると、新兵衛もワラジを履いて用意をするのでした。ところがワラジの紐を結んでいた新兵衛の手先で、その紐がプツンと音を立てて切れてしまったのです。
「どうも今日はついていないようだ。わしはやっぱり止めにしよう」
と、新兵衛は弱気になるのでした。そういう新兵衛を見ていると、伊佐もあまり気がすすみませんが、二人とも尻ごみしたと笑われるのもいまいましく思われ

ます。子分に案内されて、大金持の蔵の横手に着くと、そこの錠前は音もなくスルスルと開きます。しばらく中を覗ってから、伊佐はするりと蔵の中へ入ったのです。そのときです。

「エイッ」

とばかり伊佐に切りつけた者があったのです。伊佐の左手はばっさりと切落されてしまったのです。

「畜生、図られたか」

と、伊佐は声を立てた時には、あちこち提灯をかざして目明しが蔵の中へ入って来たのです。

「外には出られまい、奴の例の天井へ、へばりついている術ぐらいなもんだ」

と言って、灯を天井に向けたが、伊佐はどこにもいません。あちこち走り回っている目明しを尻目に、伊佐は姿を消してしまったのです。

「逃げられたか」

と、誰かが叫んだ時です。ポタリポタリと天井から血がしたたり落ちて来たの

です。

「ここだ、槍手は集まれ」

伊佐は片隅の天井に登っていたのです。

「旦那、待ってくれ、お縄を頂戴するから、お待ち下され」

こうして、さすがの伊佐も捕まってしまったのです。十両盗んでも死刑の時世ですから、もちろん、伊佐は死罪、米沢の南、白旗松原の刑場で首を切られたのでした。

（船山健重）

9　三反歩の田圃を盗んだ話

あるとき、炉ばたでの世間話のときに、長手の地主が、伊佐よ、お前は名のある盗人だそうだが、田圃は盗まれるか、とひやかした。伊佐はムッとして、ええ

りっぱに盗まれます、ときっぱりと返事をした。ではあそこにあるおれの三反歩の田圃を盗んでみろ、ほんとうにできるかということになった。いよいよ春になった。地主がそろそろ伊佐に話した。田をうなうと出掛けて行くと、もう先にちゃんとうなっている奴がいる。畦切り、代掻きと、田植えの仕事が進むたびに、先にやってるやつがいる。地主もこれにはたまげてしまった。それから田植え、田の草取りと進んで、稲刈り、稲干し、稲運びまで先々と伊佐にやられて、とうとう三反歩の田圃を盗まれてしまった。地主もこれにはあきれてしまった。

（「東北快盗伝・長手の伊佐」）

10　和田の女主人にカブトをぬぐ

和田村、下和田の渡辺数江の家は女所帯で村でも指折りの金持ちだった。伊佐は前々から、この家と見当をつけておいたが、いよいよ心にきめて、宵の中に屋

根の煙出しから忍び込み、ハリの蔭にかくれて家の人の寝るのを、今か今かと待っていた。そうしているうちに、みんな寝床に入って、一人になると、女主人が流し場に行って鏡に向って髪をとかし始めた。（この辺では家人が寝てから、女が髪をとかす習慣だった）それが終ると、お歯黒を塗り、手をよく洗い、それから勝手に行って戸棚からお膳を出してそろえ、湯釜をかけて火をたいて、御吸物を作り、徳利を出して酒をつけた。この家の主人は床酒でも飲むのかと伊佐は不思議に思い、ジッと上から見ていた。今度は座蒲団が出た。伊佐はますます不思議がった。そしたら下の方から、

「上の伊佐殿、早く梁から降りて来て、一献召上がったらどうだス」

と来た。さすがの伊佐殿もこれには返すことばが出なかった。度胸をきめて降りて来た。きまり悪そうに座に着いた。さあ一杯、と手に取らされた大きな盃になみなみと汲がれて、ますます固くなるばかりだった。何杯かいただいてから、伊佐もいくらか心のゆとりが出て来て、

「この家のおかみさんにはかなわねぇス。おれも男だから、このおれの生きてる

一生、この近郷近在には決して泥棒に入らねぇス、他のやつらにも入らせねぇス」
と、固く約束した。（梁の蔭にかくれていた伊佐の姿を髪をとかした時に写したのだった）

（「東北快盗伝・長手の伊佐」）

11　ネズミに化けて生糸を盗む

伊佐には子分が七人もいた。あるときこんなことがあった。子分たちに、
「あの家の生糸を盗って来い」
と命令した。子分たちは、
「そう言わっても、どこさ生糸があんのかわかんねぇだス」
と言うと、伊佐は、
「何をばかども、あり場所は家の者（もん）に聞け」

といって横を向いた。

「家の者にどうして聞くだス」

と聞くと、今度こそ親分もほんとうに怒って口をきかなかった。何日かたってから、親分の機嫌もいくらか直ったらしく、子分たちに向って、

「今晩、おれと一緒について来い」

といった。その晩、二人の子分をつれ、シノ竹を一尺くらいの長さに二本切り、鋸をたんがって、生糸のある家の縁の下にもぐった。親分はどうするのかと見ていると、その鋸で竹を切りはじめた。その家のジサマとバサマの二人暮しで生糸を商っていた。下の方でキイキイという音がするので、バサマは心配そうに、

「あれあれ、ネズミが入った。あの糸は大丈夫がや」

というと、ジサマは笑って、

「なに、心配すっこどねぇョ、上段のタンスの二番目にちゃんと入ってっから」

と答えた。もうこうなると、盗んだも同然だった。

（「東北快盗伝・長手の伊佐」）

12　沢中の喜太郎

小っちゃい時に、弟に、
「おれ面白いことして見せっから、庭さ出てみろ」
「なんだ、喜太郎」
「まず、ええから来てみろ」
て、オノガラ持って来て、
「見てろよ、おれ、これ登って行んから…」
なて、継いで登って行く、継いでは登って行く。見てるとずうっと登って行って小さくなってしまった。
「早かったなぁ」
と思って、親父ぁ見ておったら、後から来て、肩、ポンと叩いて、
「お父（と）、何見っだ」
て言うた。この野郎はな、と思っているうちに、十三の時いなくなった。して

泥棒になって、どんな錠でも、そこの場に行って、手を三つ打つとビンと、ひとりで開いたど。

大阪の鴻池の倉にも入って、千両箱を盗んだ。こういう泥棒が沢中から一人出てるんだぞ、お前。

泥棒をして逃げるときには、一日に四十里も行ったもんだから、とても追いかけられるもんでない。出かけるときに、笠に胸にパッと当てたものを、そのままで落ちなかったど。

（塚原名右ヱ門）

第三部　名物男佐兵次の逸話・他

安部名平次　稿

1　露藤の生んだ名物男・佐兵次

置賜の停車場から県道を北すること半里魚族で名高い天王川の橋を渡ると、平野では珍らしい萱野がつづく、露藤名物萱はそれだ。盆踊りの歌にも、「歌の節節処で変る、是処は露藤萱の節」。盆が来ると、部落の若い衆は手拭頬冠りにしながら踊る。萱は露藤名物の一つ。

萱野二三町行くと、県道をはさんで密集した部落が散在している。これが露藤の部落だ。

昔から鎮守様か、露藤には名物男は生まれるとは、近郷近在の人々の話柄になっている名物男も数多い中に、其代表的とも言うのは、だれをさしおいても佐兵次をあげなければならない。

佐兵次は享和三年、隣村下和田に生れ、幼くして露藤村下舘、高橋久兵衛に育った。先づ波瀾に富んだ同人の生い立ちを記さねばならぬ。露藤の北隣り、入生田の十字路から振興道路を東に和田脊陵山脈を望んで行くと、和田川の流れを挟ん

だ小さな部落に出る。これが二つ橋だ。更に左に折れて暫く、六角の笠塔婆が有るので地名となった六角に出る。塔婆は磨滅して定かに判明しないが、天文二十三年と言うから、かなり古い。

往時、道の東に佐右ヱ門という家はあった。夫婦の間に二人の娘はおった。姉はお市、妹はお春と言ひ、お市さんは佐右ヱ門の後嗣となり、お春さんは同村の飯爪に嫁した。運命の神は如何に人生を弄ぶ事でありましょう。人生の行路は山又山、河又河、くらい森林をやっと抜けたかと思へば果てしもない広野にさまよわねばならぬ。然かも寂しい影を浮かべてトボトボと歩み続けるのです。誠に幸い、もし一道の光明はなかったら人生も又闇から闇への旅路なのである。諺にも月に村雲花に嵐とはよく言うた。

飯爪に嫁したお春さんも其の通りであった。花の盛りに一陣の嵐無惨にも吹きにじった。里元へ帰ったお春さんは寂しかった。然かも妊娠の身重となっては…。月満ちて生れたのは男の子、佐右ヱ門の子なればとて、父は佐兵次と命名した。

月日は関守りなく過ぎて行く、お春さんは未だ若かった。十八才の春、露藤村

高橋久兵衛にと仲人され、四つの佐兵次を連れ子として後妻となった。

久兵衛は同苗又左ヱ門の新家である。元禄年間に三十数石の自作を所有しているから村では中流の資産家であったらしい。それが時代の変遷で享保年中の頃は零落し、佐兵次親子は同家に入籍した頃は極度に窮乏した。一家は水呑百姓として生きて行かなければならぬので、幼ない佐兵次は弟の子守をしてお父さんやお母さんを手伝った。其の頃学校としては寺子屋時代で、同村田中の平間玄益先生は部落の子供を集めては学問を教へた。幼ない時から学問の好な佐兵次は子守をしながら、同家の門にたたずみ、筆のかわりに、木の切れ、紙は同家の庭とし、今先生が子供に教へている処を聞いては熱心に習った。是れを見付た平間先生も非常に感心して筆紙をあたえ子弟と同じく教える事とした。一を聞いて十を知る佐兵次は先生も驚いた。是れを聞いた久兵衛は怒った。「あの子はよく平間先生の処に行く、貧乏人の子どもは学問はいらぬ」。小言たらたら、頑是ない佐兵次は子供心に悲しかった。彼れは父に逆わなかった。ふっつりと田中行きはやめた。こうして専心お父さんの手伝をした。世は走馬灯のように過ぎて行く。弟は生れ、

愛は弟に傾いて来るに及んで佐兵次は人生の味気なさを感じた。十四五才の頃は一人前としての働盛り、日雇にやとわれて働き、一家の生計を助けた。十六七才になると佐兵次も木石ならぬ身の春は芽した。恋心は身にしむ頃となった。其の頃は隣村浅川に長兵衛と言う家はあって、家は豊か、一人の娘は居った。名はおはやさんという田舎には珍らしい鄙に稀な美しい娘、人々は浅川小町よと言ひ囃した。年は二十八を迎へると一層美くしかった。若人の血はおどった。

遠縁の間とて、佐兵次は所々同家に寄寓しては農事の手伝ひ、果ては機織りなどを教へた。おはやさんもこの天才的な磊落な如才ない佐兵次を心憎くはなかった。佐兵次とて木石ならぬ身の若い血は燃えた。二人の仲はだんだんと密なるものがあった。二人の間を知ってか、媒介あって晴れて添ふの日が来た。然しこれが永遠の幸福ではない淡い恋路に過ぎなかった。佐兵次生涯の一大転機にならんとは、神ならぬ身の知る由もなかった。

晴れて添ふ鴛鴦の契りも夢の間、吾が侭育ちのおはやさん、若い男と二人手に手をとり、何処とも知らず道行をした。こうして佐兵次さんの初恋は見事に踏み

にじられた。当時彼の心境はどうであったろう。

泣いて泣いて涙も涸れ果てる迄泣きくずれた。泣き疲れると自失した佐兵次の頭上に鉄鎚はガンと響いた。そーだ鉄鎚に打れてみると、夢みて今迄の邪念はからりと晴れた村の白髭明神にお詣りしよう、一道の光明は見えた。明神のすくひでなくて何んであろう。其の日の夕刻になると、佐兵次はあの長い百二十間の昼なお暗い参道にかかった。往時から斧を入れた事のない老杉枝を交へ長い杉の洞門になっている。トボトボやって来た社の周りは参道に劣らぬ古木うっ蒼として寂しい昼さえ人の怖れる境内である。まして夕刻とて後髪引かるる寂しさやがて社前にぬかずいて拍手打ち、暫し瞑目祈願を続けた。

2　口説き節（悲恋の佐兵）

天地陰陽　自然の道理
釈迦も昔はやすたら姫よ
頓智頓才溢るる様な
今に名高く其の名は残る
矢張り佐兵も木石ならぬ
年は廿か出ても一・二
隣部落の浅川村に
思ひ染たる娘が御座る
生計豊かな長兵衛が娘
年は二十八かおはやと言ふて
鄙に稀なる其の仇姿
小野小町に百夜の通ひ

私は千日通ふかとても
おはやならでは此世はいらぬ
曇りかちなる浅川山よ
欲におはする大慈の佛
いつか此恋おはやに通じ
晴れて添ふ様御力願ふ
たとへ命をめさるるとても
せめて一度はかなへて給へ
真に切なる佐兵が恋よ
恋の通ひ路其の傍は
千古魔の渕天王川よ
人は怖れて昼さえさける

佐兵横笛自然の妙手
占めす歌口妙なる其の音
玲瓏嫋々転(ころ)がす玉よ
而かも其の曲想夫の恋は
秋の月夜に一汐冴えて
渕の大蛇も自ずと跳る
通いつめたる浅川村よ
遂におはやも佐兵の情に
関の下紐自然と解けて
たとえお西の雪消ゆるとも
離れまいぞよ二人の中と
比翼連理の其かたらひは
人も羨む其睦つことに
広い世界は二人のものよ

おはや元より我侭育ち
菜の葉あいたら桜にとまる
仇し男と又褄がさね
花に狂へる蝶々ならで
二人手をとり駆け落ちなさる
佐兵眼前大地が裂けて
無限奈落の其苦しみは
泣いて涙もはや渇れはてる
あわれ無惨な佐兵が姿
死ぬか生きるか二つに一つ
やがて佐兵は気を振り起し
どうせ免れぬ化転の娑婆よ
命長くも百まで生きぬ
人の苦労も女人が本よ

女人禁じて暮さうならば
洒脱円満苦のない浮世
そうじゃそうじゃと心をきめて
村の鎮守の白髭神社
杉の古木の八町御門
やがて神前鈴の緒ふれば
塵も邪念も迷いも晴れて
澄める心は真如の月よ
私が鎮守の白髭様よ
女人禁断誓を立てて

佐兵一生の願が御座る
とても此の世は八苦の世界
人を益すも仇にはならぬ
滑けい滑脱円満無量
苦労知らずに送らせ給へ
念じ終りて下向の折りは
運ぶ歩みも心も軽く
更生楽しき佐兵が姿　やんれ

（柳影作）

3　番所の役人に小便を呑ます

文久年間以前の屋代郷は天領と称し、徳川幕府の直轄の地であった。松川の流れを界して、糠の目窪田は上杉家の私領、流れの東三万石余の地は御預所と呼んだ。私領上杉家の領地は中興の名君鷹山公以来、節倹を極度に強要した。絹布はまとふな、木綿衣に限ること、酒は飲んではならぬ、私領の生産品たるローソクは他領に売ってはならぬ、曰く何、曰く何と幾十条と知れぬ厳重な詔が、それからそれへと布達された。領民は放縦な生活から限定された窮屈な生活に生きなければならぬので、此の大改革に反抗した処が、一葦帯水の屋代郷は別天地の趣きである。天下の領民だ。公方様の直領だと大いばりであった。

酒は各戸毎に造り、絹布をまとい、博奕をする等放縦な生活を続けているが、米穀を多額に産し、産物も豊富で苛斂誅求の私領に比し名ばかりの貢賦しか納めない郷民は更に不足を感じなかった。

当時の制度は上杉領と屋代郷との境に厳重な番所を置き、往来のものを監視し

た。佐兵次は小遣銭が無くなったので、一計を案じた。何と思うたが、酒タンポの中に小便をつめ込んで背にし、今しも糠の目の番所に差しかかった。そんなたくらみとは露知らぬ役人、佐兵次の背にしたものは勿論酒と見て取った。言うまでもなく酒は御法度である。

「これ、佐兵次、禁制の酒を何故持参した、不届者」

「はい、御役人様、これは酒ではない。小便だよ」

「だまれ佐兵、酒タンポの中に小便入れる奴があるか」

「お役人様、それでも小便だよ」

腹に一物の佐兵、其の侭通り過ぎんとした役人は怒気満面に溢れ、

「馬鹿っ、其方は公儀の役人を嘲弄するか、背中の酒をおろせ」

ずかずかと佐兵次の傍に来り、酒タンポを引ったくり、口を抜くより早く椀についで一口呑んだ。役人の顔は変った。

「げう、佐兵、貴様は公儀の役人に小便を呑ましたな」

役人は佐兵をにらんで大喝した。酒タンポは投げつけられた。見よ異臭紛々た

る悪液がタンポの中から流れ出すではないか、佐兵は一向平気、
「お役人様、それだから、さっきから小便だ、小便だと申し上げた筈、それをお聞き入れなさらず召上ったもの」
なる程、佐兵の言う通りである。役人も二の句は続けない渋い顔をして居る。
佐兵は我事成れりと酒タンポを取上げ、
「旦那様に大事な小便こぼされた」
とつぶやきながら番所を通り過ぎた。番所を通り抜けると赤い舌をペロリ、翌日は酒タンポに清酒を入れ、又番所に差しかかった役人、
「又来たな、背中のは何だ」
佐兵次、すかさず、
「これが酒だ」
役人は昨日の事でこりている。「もうよいよい、早く通れ」。しすましたりと佐兵次、糠の目、窪田家中に行きて、その酒を高価に売った。かくする事幾度、しかし番所はいつも安々と通れた。そして佐兵次のふところ具合もよかった。

（大正十五年　高橋友吉）

4　虱子（しらみ）五升の質入れ

風彩が振るわなかったが、頓才勝れた佐兵次、今日は和田に寄寓したかと思えば、明日は新田、気のむくときは幾日も逗留して、百姓仕事を手伝い、人々からは可愛がられた。

秋は訪れ、和田群山に雪が降り初めても佐兵次は浴衣一枚着ているのを見ては、可哀相な事よと綿入れを新調して呉れたり、又着古しの綿入れを貰う事も度々であった。己れは浴衣で沢山とて身にまとわず、寒さに泣く人を見るときは惜気なく恵んだ。ある時は高畠の質屋に行って小遣銭にかえった。こんな関係上、高畠の質屋とは懇意の仲であった。

ある晩秋の一日、舟橋村の豪農黒田番内から新調の綿入れを貰ったので、小遣銭にせんものと、例の高畠の質屋へとやって来た。顔なじみの番頭、何と思うた

戯談半分、
「佐兵や貴様の綿入れには過ぎた綿入だなぁ、しかし佐兵の綿入れだから虱もおったろう」
佐兵悪びれもしないで、
「はい、虱も質入れするなら五匹と記さんか、十匹と記さんか」
という。
「番頭さん五匹十匹は面倒、五升と記してくれ」
番頭は面白半分に虱五升の質入れと記した。質受けの小切れを手にして、悪びれもせず、すたすたと帰った。佐兵次が帰ると店では、
「露藤の佐兵は八っ張り名物男だな」
とはやして居た。
幾日が過ぎた頃、佐兵は店の前に顕われた。何より先に頭にかれたしまの財布を出す。珍らしく沢山の金が入っている様子、
「番頭さん、先頃はお世話になって、今日は旦那様の法要に行くんだが、綿入れ

がなくて案じておった。幸い金は出来たから貰いに来たよ」
「余り早かったな、佐兵次」
番頭は質蔵に入って、佐兵次の質入れした綿入れを持って来た。
「佐兵や、これ渡すぞ」
佐兵綿入れを受取って居ったが不審顔、
「番頭さん綿入れはこれに相違ないが、虱はどこだ」
番頭、笑いながら、
「佐兵や戯談だったよ、そんなものは有りやしない」
しかし何と考えたか、そんな事は聞かぬ。
「番頭さん何を言うんだよ。質入れの小切れにも、この通り虱五升と添書あるんだよ、たしかに預けた筈、今日はどうしても貰って行かなければならない」
と頑張って聞かぬ。番頭がいくら弁解しても帰らぬ朝はいつか昼になった。
けれどもおとなしい佐兵、今日はどうした事かいつかな聞かない。これがため店は騒然、夕刻、用事あって外出した店の主人が帰って来た。この有様を見ても

流石は大家の主人世情にたけて居た。

「これは佐兵次さん、番頭は申訳のない事をした、実は虱を土蔵に入れて置いたら皆はい出し、今更集めるに困難だ。番頭の不注意は己れの不注意この通り詫びるから、虱を金にかえて呉れ」

と一包みの金を佐兵次の前に置いた。さすがは大家の主人であった。今迄笑顔一つしなかった佐兵次、

「旦那様なら話せる、番頭さんなら、如何にしても虱は貰って行くが、旦那さんなら、是の侭帰るよ」

と、金には目もくれず、綿入れをかかえて家に帰った。此の事あって以来、高畠地方では佐兵次をさげすまなかったという。

（安政年間頃の逸話・安部喜兵衛）

5　弊馬草を食う

部落から南方四町の地露藤村と下新田村との界に天王川の流水がある。源は栗子岳に発し、上郷村の中央部を横ぎり、露藤の南から西に流れて松川に入る。種々雑多な伝説に富んでいる神秘な川だ。昭和六年モダーンな鉄筋コンクリートな橋にかけ替えられた。橋の東北の方に一町に余る原野がある。里民これを五輪窪原という。ある真夏の日であった。村の若衆大勢して野良仕事をしておった処あわただしく走って来た佐兵次見れば血相変えている。

「若い衆、大変なものを見て来た」

一同何事ならんと不審顔、

「若い衆、佐兵は今五輪窪で大変なものを見て来たが、死んだ馬が草を喰っておるぞ」

見れば佐兵次だから真実としない。世はいくら開けたとて、死んだ馬が草食うと言う、馬鹿げた事はないから、

「佐兵次や、馬鹿も中位にした方がよいぞ」

しかし佐兵次は仲々聞かない。

「皆の衆や、己れも真実と思われなかったが、全くそうだから己れも驚いた」

と真面目顔、佐兵は尚も言う。決して戯談は言わぬつもりと真面目顔、野良仕事の若い衆達、佐兵の真面目顔に釣込まれ、鍬の手を休め、

「兎も角、行ってみよう、佐兵、案内しろ」

やがて一同珍らしい死馬の草食い居るを見るべく、ぞろぞろと跡からやって来た。処が何んの事一頭の死馬が原の中央頃に、真夏の事とて悪臭鼻をつき、とうていその近くによりつけない。一同あきれて佐兵次をなじった。

「佐兵次や、死んだ馬はどこで草を食って居ったのか」

佐兵次はけろりとしたもの、

「皆の衆、よく見さっしゃい、死んだ馬は臭くって、寄りつかんないではないか」

一同唖然として、今更ながら、佐兵次の頓智に大笑した。

（近野善兵衛・大正十五年採集）

6　芋あぶりと豆腐汁の馳走

和田の某家と聞いたが、酷く吝嗇な家があった。人に恵むなどという事は、更になく唯蓄える一方である。家は普請され、土蔵は建てられた。しかし矢張り相変らずの吝嗇家で衆人のためなどと言う事は露程もない。そういう有様だから、人に馳走するなどという事は更にない。これが附近の人々の話柄になっていた。

今日も佐兵次の寄寓する某の家に四五人の人々が集まって炉辺をかこんで話をしておった。話を聞くと誰一人として、彼の家に行って馳走になった事はないと言うのであった。黙って聞いて居った佐兵次、

「皆の衆、あの家に行って馳走になる事なぞは雑作もない話だ。俺などは思ったものは何でも馳走になられるが」

と語った。居合せた人々は異口同音に、

「いか程、佐兵は頓才勝れても、相手が相手だから、それだけは出来まい」

「そんなら、今夜にも行って馳走になって見せるがどうか」

一座の人々、いつもながらに佐兵次の頓智に手痛くやられているので、今度こそ奴の高慢鼻をへし折ってやろうと、先ず年長の治平さん、

「よかろう、だが佐兵や、先方に行って、もし馳走になれなかったらどうするぞ」

佐兵次は笑いながら、

「そんなら、俺が馳走になって来たらどうする」

と、仲々理屈には負けていない。

「じゃ、貴様が馳走になって来たら、みんなで手前の呑める丈酒を買おう、しかしもし馳走になれなかったら…」

「そんな事、大丈夫、もし負けたら、この首やるぞ」

一同手をたたいて笑った。又佐兵次の十八番は始まったぞ。結局、もし佐兵が勝ったらうまい肴で酒十杯買う事、もし負けたら一同の家に無給で一ヶ月づつ働くという条件、見届け役として治平さんが付添い一緒に行く事になった。

家を出るとき、佐兵次、

「皆さん、酒は早く買って貰いたい、但し上酒たのむ、肴は美味い品を買って来

て呉れ」

一同その言いぶりは余りに心憎かった。秋の日脚は短かくて、日は大荒山にトップリと落ち、和田脊陵山脈も暮色につつまれた頃、二人同道で、かの家を訪れた。今しも一家秋の収穫から帰って炉辺に集まり、夕飯前に芋あぶりをしておった。これがこの家の家法であった。

治平さんと佐兵次とが訪れると、あわてふためいて芋を灰の中に埋めてしまった。夕飯のおさかなとて炉には豆腐汁鍋がかかって居る。

「これは治平さんに佐兵さん、何か出来ておいでか」

という。

「いや、別段に用という程でもないが…」

治平さん、どうして佐兵次は馳走になるのかと固唾を呑んで見ている。やがて佐兵次はポツリポツリ話のいとぐちをきった。

「先頃の大洪水で五輪窪の橋は流れてしまったので、村中で橋普請を始めた。何せ流れの急な天王川の事であるから今度こそ流れぬようにと、部落の人々の意気

込みはたいしたものであった。朝の三時頃というに起きて現場につめて一生懸命に働いた。木はお林から切られて場所に運ばれた」

「こう見えても佐兵次など一年中村の厄介になっているから恩を報ずるは是の時と第一に駆付けて働いた。その中大杭は打ち込まれた佐兵次などは向う鉢巻をして、赤いたすきがけ堂突歌を歌うと、どんどん杭は打ち込まれた。それが終ると又こちらの方に」

と火箸を引上げると芋は引上げた。

「これは芋か、芋なら佐兵次の大好物一つ御馳走になって」

皮をむいて頬張った芋食いは終ると、又杭打ちは始まった。

「又こちらに打込まれた」

又火箸でブツリ、拳大の芋は上った。

「又芋か、こちらの芋は格別うまい」

橋普請の話は又続く。杭打ち初まる度は芋は上った。一家は唖然として、治平さんアングリ一人言。

「えらい」

その頓智頓才には唯々敬服の外はなかった。芋が尽きると橘普請の話は終った。

二人の来客のためまだ夕食にしない豆腐汁の匂いはうまそうだ。佐兵次はこの豆腐汁に目をつけた。

「己れの部落の親方は昔話が大好きで、おれが行くと喜んで色々と話して聞かせる。先頃行ったら面白い昔話を聞いて来た」

「佐兵や、昔の英雄豪傑は偉い親の讐を打たんが為めには、どんな艱難もいとわず、幾年も幾年も撓わずに腕をきたえて親の讐を打ったものだ。宮本武蔵は親の仇、佐々木巌柳を打たんとて、千辛万苦をなめたが、あの巌柳の燕返しの太刀を破るには自分の腕は未だ未熟であった。思案の末、かねて天下に知られた剣術の先生塚原卜伝が深山に隠遁したという事を聞いてはるばるそこへ尋ねたのであった。山又山と分け入り、其の日の夕方遙か前方に当って灯の光がチラリと見えたが、これが先生のかくれ家と思って訪れば、一人の老人がおった。

「道に迷った者一夜の宿を願ったら、見る通りの小屋なれば食うものなしとて断

られた。再三歎願の末、宿を借りることとなり、稗飯を馳走となって、武芸の話に花が咲く。

その内、老人はコクリコクリ居眠りをはじめた様子、炉中の焔火（ほだび）は盛んに燃えて居る。武蔵は何とかして試して見たかった。頃はよしと傍にあった木剣取るより早く老人の脳天目がけて打ちおろした老人の頭は真二つと思いきや、眠った筈の老人、炉にかけた鍋の蓋を取るより早く、ハッシとばかり受け止めた」

と、佐兵次、豆腐汁の鍋の蓋を取るより早く木剣を受け止める真似をした。

「あっ、豆腐汁か、佐兵は豆腐汁なら何よりの好物、一杯馳走しておくれ」

一家は思わぬ佐兵次の話に釣込まれ、其の計略とは夢とも知らず。

「かかぁ、佐兵次さんに豆腐汁御馳走し申せ」

やがて、汁椀に一杯御馳走になり、盛りかえてまた一杯。

治平さん、開いた口が塞がらず、唯一人傍で苦笑するばかり。こうして佐兵次の手へ五十文の金は握られた。十杯の酒は若衆に振舞った。

（天保時代の逸話・今井春吉）

7　十一毛の猫を見て来た

こうして、佐兵次、気の向くときは、百姓の手伝いなどをして幾日も泊りを重ね、嫌になるとさっさと出て行く。彼は欲もなく、恋もなく至るところで奇行を演じて一家を笑わせ、貧しい者を見れば吝しげもなく小遣銭を呉れ、又人より貰った衣物すらもあたえたものだ。それで、何処でも佐兵次が来たと言えば喜んで彼を迎えた。一日の労が終ると、佐兵次の膳には肴が供えられた。すると佐兵次、

「旦那様、私は海のものより畑のものは大好きだよ、百姓は収入の細いもの、金出して買ったものは嫌だから」

と、箸とらぬ。それとなくいましめたのだ。秋の夜長になると、彼の最も天才とするイヂコを作った。馬のサドカケも編んだ。殊にサドカケに至っては天才的であった。若い女には機織りを教えた。

ある夜、炉辺話にその家の内儀、

「佐兵次さん、お前さん、世間を廻って珍らしいものも見たろう、夜話に聞かせ

ておくれ」

「姉さん、私は花のお江戸迄も行ったが、珍らしい物もない、只一つ先頃梓山に行って珍らしい物を見た。それは十一毛の猫、これが一番珍らしかった」

「何、十一毛の猫、三毛猫は居るが、十一毛、それぁ珍らしい、何処でや」

「それは私の親しく出入する旦那の家でよ、矢張り三毛猫、それが誤って炉の中に落ちて焼け（八毛）てしまった。八毛と三毛で都合十一毛の猫だよ」

その家の妻女、唖然としてしまった。

一日、佐兵次の編んだサドカケを見たことがあった。その妙技に至っては、驚嘆しなければならぬ。ああした話に聞く馬鹿な風彩の佐兵次とは思われぬ。

（嘉永年中の逸話・安部常蔵）

8　五輪窪狐の狂歌

露藤の部落から南に二町、天王川の流れの手前から作場道を東すると、部落の共同墓地がある。墓地の東隣りに原があった。中の原という。けれども五輪窪原の方は通りがよい。去年、中島部落の開墾事業として開墾し、過半は新田と化し黄金の浪を漂わせた。

昔の江戸街道は原と墓地の間を縫って北から南に蛇の台を通り、天王川の土橋を渡って隣村下新田に延びて行く。この五輪窪は人里離れた処とて、狐狸の類、棲息して道行く人を化かした五輪窪の狐の話は余りにも有名である。

丁度その頃、部落の豪家平間藤四郎さん、十数年の間堰役（四ケ村堰）を勤役してその功労大いに見るべきものがあった。同人については堰役としての美談は沢山残っている。藤四郎さん、日々濠に添うて上り帰りは又濠に添うて下った。

又水増しのために濠の堤防が決壊するのを恐れ、自宅の流し場に危険個所（杭を打ちそれがかくれると）と定めて置き、大雨が降ると夜中時分でも起きて隣家

の竹蔵（常人夫）を起こした。「竹蔵、堰の横口破るんだ」。熊手片手に大雨を衝いて行く。こうして堰の決壊を未然に防いだ。常に語っていうよう、百姓は灌漑用水ほど大切なものはない。今自分は一村の重大責任を負わされているから、少しの事でもゆるがせにする事は出来ぬと、四ケ村の有志相謀り、其の徳をたたえ、嘉永年間に露藤の分水口辺に表功碑を建て、其の功労を永久に残した。

同人、四ケ村堰役として勤役中のこと、其の年は珍らしく旱魃であった。羽黒川の水は不足して松川から水を堰上げた。堰祝いをした。元来上戸な同人、酔うと部落の茶屋で過度に呑み、遂に其夜は呑み明かした。暴飲暴食の祟りは恐ろしかった。これが為め数日床につかなければならなかった。四ケ村堰の水は見る見る減水した。丁度隣家の佐兵次、同家の門口に墨黒々と一首の狂歌を書いて貼った。

堰役も五輪窪狐に化されて　四ケ村堀に水はこんこん

というから、随分五輪窪狐には行路の人々は化されたらしい。藤四郎さんこれを見て、これはたしかに佐兵次の仕業に相違ない、常々責任感のつよい同氏、心

配でならぬ。全快もせぬに病をおして勤役した。程経て佐兵次を招いた。佐兵や心のゆるみが来たところ、貴様がたがをかけて呉れて、藤四郎も前の様になった。これからは堰役中決して酒はのまぬ。まず一つと結構な馳走をした。佐兵次は常日頃、藤四郎さんの勤役振りには敬服して居ったから、少しの落度のため人々に迷惑をかけ、人格を傷つけさせたくなかったが故に、それとなく戒めたのであった。

「親方、あなたは個人の藤四郎ではありませんぞ、四ケ村を背負っている。貴方少し気をつけなさい」

こうして佐兵次に教えられたのであった。同役の勤役中、四ケ村堰の水は満々として流れ、四ケ村堰の人々は謳歌した。これを見た佐兵次、ある時白紙に一首をものして藤四郎に送った。

四ケ村の水は妙法蓮華経　てれば照るほど水はだぶだぶ

（弘化年中の逸話・高橋友吉）

9　十手風を吹かす役人をこらす

天保の飢饉は奥州殊にみじめなものであった。殊に仙台伊達方面は甚しく比較的貯蓄をしておった米沢藩は惨めなものではなかった。上杉には名君鷹山公の美徳を承けて備荒倉の貯えがあったからであった。

七ヶ宿越えは雪崩を打って屋代郷に入り込んだ。初めは施粥をしたが、それからそれと人々に応ずる訳には行かぬ。中途で仆れる者、死ぬ者、郷内に入ってもここの堂宇に一団、かしこに一と群と其の惨状目もあてられぬものがあった。

倹約の御布令は矢つぎ早に通達された酒は呑むな、米は他国に売るな、木綿衣より他着るな、三食中一度は必ずソバ粉かカユを食する事、ワラビの根は掘るべからず。曰く何、曰く何、と厳重な布達、それに反すると役人は用捨なく捕えて牢に打ち込んだ。

諸人が飢に泣くというのに、役人ばかりは違反の者を捕え恩賞に預ることが出来た。少量の骨休めの酒を飲んだ者、親類の飢を救わんとて米を背負い行く者、

見付け次第自分の功とした郷民の者共、これには悉く難儀した。隣村の某は飲酒したとて牢に入れられた村の某も法要の酒を飲んだとて牢舎に入れられた。これを目撃した佐兵次、何と思ったか酷く酔うた振りをして亀岡の御役所の前を通った。人々はもし佐兵次が役人に見付けらるれば有無を言わさず牢に投込まれる事故、それとなく注意した。しかし胸に一物ある佐兵次、わざと役人に聞こえよがしに大声で怒鳴って行く。これを咎めぬわけには、役人も参らぬ。

「佐兵や、酒が御法度だという事を知らんか」

「御役様、それぁもう名主様から幾度も注意されて知ってはおるなれど、露藤の某の処へ行くと沢山酒を作っておいて、呑め呑めと強いられる。今日も行ったら呑まされてこの通り、お役人様も呑みたけりゃ、某の処に限るぞ」

何か深い計略のある佐兵次、役人は其の巧みにおとされた。

「何、酒を造って居る処がある。それは真実か佐兵、貴様案内しろ」

「それはお役人様、案内しろと言われれば案内しない事はないが、御褒美を下さいますか」

「案内すればやる。宜しく教えてくれた。何者か存ぜぬが不届至極の奴、さぁ案内しろ」

また、手柄が出来たと役人は十手片手に外出姿、

「お役人様、私が案内するが宜しいか、これからその家で酒を呑む事は出来ぬから、沢山御褒美を頂かなければならぬ。又私が今日酒を呑んだとて、牢屋に入れられるならば、案内出来ぬ」

「よいよい」

役人としては佐兵次などはどうでもよい。枝はどうでも其の根を知りたかった。佐兵次は酔歩蹣跚として先頭に立って行く、部落の人々は奇妙な二人の道行きを眺めておる。

やがて露藤の部落に入った役人は何処の辺やと佐兵に尋ねる。佐兵次はけろりとしたもの。

「お役人様酒造りなどは厳重な御法度故、この部落の中にはそんな人は一人も居らぬ。こちらの方だから、私の跡をつけてお出でなさえ」

部落を過ぎて川原の方へ行く。不審に思った役人、
「こちらには家はないではないか」
「お役人様、こちらだ」
と、松川ばたに連れて来た。役人、
「佐兵やここは川原ではないか」
「いや、酒を造る家は向うの方だ」
と、松川の川辺を川上の方に連れて行く、まるで狐につつまれたようである。
「まだか、佐兵」
松川端に酒を造る家などある筈はない。役人をこりさせるためだから、新田あたりまで道のないところを草を分け、ばらをかきわけ、役人は佐兵に引廻された。けれども密造の家はない。
「密造の家はないではないか」
しかし佐兵は呑気なもの。
「いや、こちらの方かも知れん」

又同じ道を下る。

「まだこの辺かも知れん」

とて、柳の株などを棒切れで突く。川魚狩りと思っているらしい。役人もややもすると道行きの早い佐兵次に遅れ勝ち、薮をかきわけ、脛を痛め散々な目に遇(あ)った。佐兵にしてやられたと気付いたときはすでに遅かった。

「佐兵、馬鹿も大抵にしろ、もうおれは帰る」

「お役人様、もう直ぐだよ」

「よいよい、おれは帰る」

と、ぶりぶり怒って帰った。それからというものはそう十手風は吹かせなかったという。

（安政年中の逸話・高橋友吉）

10　いぢこ作り高慢な男をこらす

佐兵次は露藤の自宅にいることは稀で、隣村から隣村へと転々として漂泊し、東は七ヶ宿方面から南は関・大沢、西は玉庭辺まで足跡を印し、至る処に奇行逸話を残し、人々に可愛がられた。身体は低く五尺一寸位で其晩年になってからは三味線を背負い、腰に物差をさして歩いた。又日記は一日として欠いた事がない。何月何日、某宅泊り、旦那何歳内儀何歳家族何人と精細に書いた珍らしい道具などを見る時は腰から物差しを取り出して、何尺何寸と書き留め、他日右寸法を見て手細工した。数年前の事、部落の某宅で佐兵次の制作したという戸棚並びに簞笥を見たが、本職としても恥ない作であった。機織りの道具は自ら作った。歩くときは、サツキ笠を離さず、思案に耽けって路端にたたずむ。

「佐兵、何を思案して居る何処へ行くのか」

と言えど黙っている再三に及ぶと、

「何、おれの行く先は足の向き次第さ」

と。いぢこは前にも書いたが、天才的に上手であった。気のむく時は半分仕掛けた侭さっさとやめて行く。幾日たっても作らない、亀岡に行った時と聞いたある人の炉辺話に、佐兵はいぢこ作りの名人、日に三つも作るぞと語った。

「馬鹿な、いくら上手でも、一人前は藁こしらえして、一つときまっている。三人前は出来るものではない」

とて、真としない。しかし佐兵次は気のむく時は三つ位はこしらえたという。

ちょうど秋のたそがれの頃、その家の娘、婚家から帰って、程なく玉のような男の子を挙げた。折よく佐兵次が来たので、これ幸いといぢこを頼んだ。

「佐兵次や兼ねてお前はいぢこ作りは上手、日に三つも作ると聞いたが、実際作ることは出来まい」

と横柄な言い草、むっとしたが、そこは佐兵次、顔色には出さぬ。

「旦那、私は上手とは行かないが、いぢこ作りは一番の得手、実際三つ位は作るよ」

「そうか、それは何よりの幸せ、この間初孫が出来たんで今日は一つ作って呉れ

んか」
「おれでよければ作って進ぜる」
仕事着に着換えると佐兵次、厩に行って藁ごしらえにかかった。暫くすると炉辺にやって来て、
「旦那、何せいおこは祝い事であるから、一本祝って貰う事としているから」
「そうか、嬶や一本かけろ」
はいと言って、その家の妻子はいそいそと仕度にかかった。重ねて佐兵次、
「肴は頭付で馳走になろう」
炉辺で旦那相手に二本馳走になった。何と思ったか、佐兵次、気分でも勝れぬ様子、旦那、佐兵次に向い、
「佐兵次や、何か心配事でもあるのか」
「はい、実は急に心配事が出来たんで、祝いものだから、気分の悪い時は作らぬ事として明日は作るから、藁ばかり拵えて下さい」
と、其の日は帰って了った。

翌日は佐兵次、来て作って呉れる事と藁拵えして、待てど暮せど来てくれぬ。幾日たっても姿さえ見せない。奴三つ作るなどと高慢な事をいうたものだから、来るとて来られないのだろう。途中で佐兵次に会うたら、高慢の鼻をひしいで呉れんと待っていた。それから二月程すぎて和田街道でピタリ出合がしら、

「佐兵次でないか、露藤者というと油断はならんて」

「旦那、申訳がない、私も忙しいもんだから、つい失礼した。今日は廻って作って行こう」

「そうか、それなら作っておくれ」

二人同道で彼の家に来た。又藁拵えすると、佐兵次、

「何せ旦那、今日はどうあっても作って行くが、祝いだから、一本馳走になろう」

そうかと又酒の仕度一本は、又一本、ほろ酔機嫌になった佐兵次、又作らんではないかと案じて来た一家の者、

「祝いは後から沢山お上り、そう酔っては作られんではないか」

「旦那、私は大丈夫、いぢこの二つや三つは酔えば酔うほど手が運ぶから」

三本四本と馳走になった。

「時に旦那、相談しなければならぬ事が出来た。実はおれの作ったいぢこは何処も不縁となって実は不吉なものだから、一応話して、よからば作るが」

家内の者は、その意外におどろいて、

「佐兵や、不吉ないぢこ、もうやめてくれ」

「これは只馳走になった」

と笑いながら同家の門を去ったのであった。

（鼠持平内）

11　砂糖一樽みな食う

佐兵次、米沢の城下に行った時の事であった。ちょうど菓子屋の主人、今頻りに砂糖をこわしておった。何と思ったか、佐兵次、一心になってそのこわす様子

を見詰めておった。店の主人、店前の人はと見れば、風彩のあがらない佐兵次、
「佐兵や、何か買物の品でもあるのか」
「何、旦那、別に買物とてもないが、佐兵次は砂糖は大好きで、人の驚くほど食うことができるよ」
「そうか、下戸は砂糖は好きだからなぁ、佐兵、二百匁も食われるか」
「何、旦那様、佐兵は二百匁や三百匁などは歯の間に入って了う。気になって食ったら一樽位は食われるよ」
「何、一樽。馬鹿な、本当に食われるか」
「本当だよ」
店の主人も物好きだ。
「よし、佐兵砂糖一樽食れるというなら、おれは食わせてやるが、もし食れなかったらどうするぞ」
「旦那、もし佐兵が食れなかったら、此の首をやるぞ」
その言い草は面白い、こうして店の主人と賭けが始まったのであった。店の前

は沢山の見物だ。やがて樽の前に行った佐兵次、樽の中から取っては食い、さもうまそうに詰込む。

「旦那、こんな馳走は近頃にない事だよ」

と、取っては食い、ややしばし、もう是以上は食われなくなると、

「旦那、非常にうまかった。又明日も来て、馳走になるぞ」

「なに、佐兵次、一樽の砂糖はとても食われまい、約束だから首を置いて行け」

「これはしたり、旦那、佐兵次は一樽の砂糖は食われるが、今食うとは言わぬ筈。又明日も明後日も来て食うが」

なる程そう言われて見れば、理屈のあること、店の主人も佐兵次に一杯見事にくわされ、二の句はつげなかったという。

12 魚屋問答

高畠町に桑名屋甚兵衛という魚屋があった。其の頃、肴といえば仙台から七ヶ宿の街道を背負って商ったものだ。殊に一塩の鮭など店前に陳列されると非常に珍らしいものとされた。値も又意外に高価であった。

ある秋の日の事、佐兵次、例の風彩で桑名屋の店頭に立った。ちょうど一尾の鮭は並べられて居った。鮭屋の主人、佐兵次と見てからかい始めた。

「佐兵次さん、どうだい、初漁の鮭、今仙台から届いたばかりだが、欲しくないか」

「うまそうだが、一体いくらだべ」

と答えると、鰊屋の主人、佐兵次の事だから、鐚一文持って居らんだろうと思って、

「初鮭だから高いよ、だが佐兵さんの事だから、特別まけて五文にして置こう」

というと、佐兵次、早速懐中から五文を出して、

「じゃ、買って行くよ」
とその鮭を持って行かんとした。鰊屋、びっくりし、
「おっと一寸待ってくれ、其の鮭に少し聞きたいことがあるんだ」
と、鮭にむかって一人言、
「おい、お前、佐兵次の所に行く気かね」
「うんうんそうか、佐兵次さん、この鮭はお前の処に行くが嫌じゃそうだから、又この次に買って呉れ」
と、これを取り上げてしまった。「ああそうか」と黙って帰った。やがて二十日ほど過ぎてから、佐兵次、晴衣をつけて鰊屋にやって来た主人の甚兵衛、びっくりして、
「これはこれは素晴らしい姿をしてどうしたい」
と言えば、佐兵次、
「実は桑名屋さん、旦那の婚礼なので、おれは買物にやって来たんだ。一つお前の店で魚を買いたいと思うが、その前に八百屋に行ってくるから帰りまで取りそ

ろえて置いてもらいたいがね」
と、注文の仕切書を出した、見れば余程大家の婚礼と見えて、かれこれ五両程の品物だ。桑名屋の主人大喜び、早速店中のありたけの品を取出し、切るべきものは切り料理すべきものは料理し、それで足りないものは、あちらこちらと駈廻り、ちょうど注文の品だけを取り揃えて佐兵次の来るのを待って居った。
「よく早速揃えて呉れましたな。処で値段はいくらになるかね」
と言えば、
「へえへえ、どうも有難う存じました。ちょうど五両二分二朱になります」
と答えると、佐兵次、財布からざらりと金を出し、五両二分二朱を並べると主人は喜んで、
「へえへえ、確かに頂戴いたしました」
と受取ろうとすると、佐兵次、
「おっと、一寸待ってもらいたい。実は其の金に少し聞きたい事があるんだ」
「おい、小判、お前はこの家にいたいか、何？嫌だ、ああそうか、それじゃ仕方

がない、桑名屋さん、お気の毒だが、又この次に買う事にいたしましょう」
と、その金をザラザラと集めて財布に入れ「はい、さようなら」と帰って行った。

（大正十五年・高橋友吉）

13　金の無心した浪人者を追返す

入生田の十字路から西に行くこと一町、高板塀にかこまれ、幾棟の土蔵一見して豪農として知られる。その当時、屋代郷の四人衆の長者として知られる、栗田惣兵衛さんである。佐兵次時々同家に行って、小用などをして手伝っておったある春日の事であった。一人の浪人風の大男、年令三十歳前後、顔は黒く、目は鋭く五分月代、背は高く実に怖ろしい様な奴が同家の門に立ち寄った。
「おれは諸国修業の者であるが、草鞋銭をもらいたい」

と怒鳴った。女子供は恐れて中間の方へ逃げかくれた。ちょうどその時、佐兵次が居ったが、のこのこやって来て、

「これはこれは、御無理な仰せ、当家には草鞋セン（銭は千）、ところが一足の草鞋も事欠いて今朝も若者は草刈りに行くに片足の草鞋もないというておった。」というたら、何て思ったか、浪人者苦笑して、何事も言わんで立去った。浪人者の立ち去った後に、佐兵次、惣兵衛さん夫妻に大層ほめられた。

（大正十五年・高橋友吉）

14　嶋蔵さんと謎問答

入生田村の近野忠内さんは幼名を嶋蔵といった。不幸にして幼ない時、失明して片目だけとなった。性来才智人に勝れ、よく公事に通じておった。屋代郷の三めっこと言われた。又独眼忠内と呼ばれた。四ケ村の堰役を久しく勤めて功労が

あり、村の有志近野家の庭に碑をたて永遠に同人の徳を残した。佐兵次さん、折り折り同家を訪れては座談に花を咲かせた。ある日の事、炉辺話に佐兵次さん、笑いながら、

「こちらの家は仲々便利な家だ。寝溜め（失明の目に通ず）起溜め（片目に通ず）があるから」と、家内の人々はさっぱりと分らない。一人嶋蔵さん解し苦笑するばかりであった。よし佐兵次奴を一つ困らして呉れんと、

「時に佐兵や、お前は仲々の頓智者だが、おれの謎を解かれるかえ」

と、言うと、どんな謎でも解いて見せましょうと佐兵次は答えた。

「そんなら言うが、佐兵次とかけて何と解く」

と問題出せば流石の佐兵次も余りの皮肉な謎にすぐに答は浮かばない。考えこんでいると嶋蔵さん、

「仲々むずかしいと見える、それでは一つわしが解いてやろう、佐兵次とかけてタン虫と解く、その心は、廻って食う」

と言えば、炉辺どっと笑った。佐兵どんな顔をするかと見れば至って平気なも

の、嶋蔵さんに向って佐兵次、
「旦那、今度はおれの番だが、解って呉れ、問題は嶋蔵親方とかけて何と解くんだね」
　又返報かと思うたが、嶋蔵さん一つ目出度解してやろうと思ったが、仲々解されぬ。反対に考え込んだ。これを見て、佐兵次、
「親方、親方、むづかしいと見えるな、そんならわしが解いて見よう、嶋親方とかけて婚礼の結の盃と解く」
　と言えば、一家の者、
「これは目出度い、目出度い」
　と笑った。
「さて、その心は何ん」と聞くと、佐兵次、小声になり、
「その心は一生の固め（片目）」と言うたので、嶋蔵さん、初め一家の者目出度いは何処へやら、互に顔を見合せ唖然として苦笑した嶋蔵さんなら、佐兵にだけはかなわんと言うた。

（明治三十八年・安部名平次）

15　彪の皮で屋根を葺く

露藤から北に三里離れた宮内町は製糸場の多いので名高い幾十棟と知れぬ工場の煙筒から煤煙をはいて天日ために曇らしている。年を逐うて町は発展し、置賜の経済の中心地だとまで言われている。

しかし今から七八十年以前の宮内は寂しい一寒村の駅場に過ぎなかった。うっそうとして茂る熊野の森、その宮に鎮座する熊野の社もねぐら鳥の宿であった。今も変りはないが、町の南端を六角の卒塔婆があるから、その名は命名したとやら、この六角町の事について面白い話は残って居る、長い冬籠りから覚め朗かな春日和が続けば、野も山も白衣をすてて別天地となる。飯豊おろしの春風が吹く、時としては気まぐれな強い風は吹いて、草屋根を飛す春風はこわい者の一つにさ

れている。ある春の日の事、春は未だ浅いので、部落の若衆大勢集まって藁仕事に余念はない。そこへのこのこやって来た佐兵次、

「皆の衆や、佐兵次は昨日宮内に行って来たが、何様、宮内はよい処だよ」

と、さも珍らしいものを見て来た様子、振りむけば、例の佐兵次さんだから、

「なんだい、そんなとんきょう声で…」

「いや、宮内はあんなよい処とは思わなかったよ、屋根葺というから、どこも萱なんだが、宮内では彪の皮で屋根を葺いておった」

「馬鹿な、いくら宮内というたって、虎の皮や彪の皮で屋根葺く筈はない」

若衆は笑って真実としない。

「だが、それはたしかなもの、佐兵も見て驚いて来た」

あまりに真面目さに好奇心は沸いてきた。

「しかし佐兵次さんの事だから、又やられるか知れぬ、もしも彪の皮でなかったら、どうするかね」

佐兵次、すました顔で、

「何間違いないが、念のため見届け、どちらが負けても酒十杯の賭としよう」
又賭けは始まった。今日はおそい、明日、若衆の内二人えらばれて見届けする事となった。翌日となった。今の様な汽車の便利がなければ、自動車の便もない。その頃、膝栗毛によるより外なかった。一行三人宮内町の六角町に入った二人は好奇心にも彪の皮の屋根を早く見たかった。
「おい、佐兵次さん、彪の皮の屋根はどこにあるんだい」
佐兵次さん、呑気なもの、「すぐだよ」。六角町のある一軒の家、先頃の烈風に屋根吹きとばされ、急の処置に米俵を以って塞いでおった。それを指して、
「あれだよ、彪の皮の屋根は」
同行の二人指された処見れば、なんの事、米俵だから、余りの馬鹿馬鹿しさに佐兵次になじった。
「佐兵次さん、馬鹿も大抵にした方はよいぞ、彪の皮などと人をだまして、あれは米俵でないか」
処至って平気な佐兵次、

「お前達、そんなに怒っては困る。おれは彪の皮だから、彪の皮だというたまでの事、賭もおれはしたではない、まず見よ、米俵は一俵、二俵と数える筈、その米俵の中の米はないから、彪（俵）の皮だよ」

若者二人、あいた口は塞らない。こうして佐兵次は久しぶりで酒の馳走にあずかった。

（昭和五年・平間良重）

16　武　士　問　答

私領と御預所の境に、お番所があって、役人が出張して、往来の人々を改めた事は前に話したが、間道として露藤西の外の内にも口留番所というのがあって、二三人宛の上杉役人出張しては厳重に往来の人々を改めた。

私領にしげく往来する佐兵次とて、番所の役人共、顔なじみ役人は風彩の振は

ない。佐兵次をからかうのであった。今しも私領の尾長島に行こうとて通りかかった佐兵次、背には小箱様なものを背負っている。又しも佐兵次をからかい始めた。

「佐兵次や今日は何処へ行くんだ」

すると佐兵次、

「はいお役人様、佐兵次は私領に行くんだ」

「ここは私領じゃないか、私領の何処に行くんだ」

「はい、今日は佐兵次、足の向き次第だよ」

役人はむっとした、常にからかわれているんで、今日はどうした事か言葉さえとがって、答えて、

「何、足のむいた方とは、貴様、ひょうげた奴」

「これはお役人様、佐兵次はひょう下駄は履いた事もないが、役人、よし佐兵次頓智を以っておれを困らすつもり、よし、今日は奴を困らして呉れん」

と、

「今日は仲々面白いことを言うが、時に貴様に聞くが、佐兵は百姓の何をしてい

るんだ」
「はい、お役人様、戯談だよ、てまとりをしております」
「そうか、役人は其のてまとりという鳥を見たことはないが、佐兵や、どんな鳥か」
今度こそ佐兵次、返答に窮したろうと思ったら、いたって平気の平左、
「お役人様、一寸お尋ねいたしますが、お役人様はお殿様から何をいただいておりますか」
妙な事を聞く者だと、役人、それは佐兵次が謀っているとは知らない。
「役人か、自分たちは士農工商というてな、百姓や町人の先に立つお武士なんだ。お殿様から御扶持というものをいただいている。つまり御扶持取りなんだ」
「そうでありますか、お役人様、佐兵次はまだ御扶持鳥という鳥を見たことはないが、どんな鳥でしょう。お答え聞いてから、てま鳥のお話いたしましょう」
手痛くやられたそこが武士気質、百姓風情の佐兵次に負けたくない。
「だがな、佐兵や、武士がいるから百姓町人は其の日を安康に過せるというもの、

武士は居らなかったら、一日も貴様達は此の世に居られないからな」

「それはお役人様、ちがう。百姓は一年中玉のような汗を流してお米を穫り、そのお米は上納米となって、お役人様の御扶持となりますよ。つまり、てま鳥は精出して御扶持となるのですよ。もし百姓はいなかったらお役人様、死んでしまうよ」

と、又も痛いところ、ちくり。役人も佐兵次の相手ではなかった。すっかり返答に窮した。よいよい通れ、はいさようなら、すたすた番所を通った。

17　琵琶頸の俗地名と十三・七つ

露藤の名左ヱ門さんは村ではの旧家、人望もあり、米沢藩学に学んだ人であって、当時は名主をつとめた人でした。藩学は米沢藩士のためにもうけられたものでありましたから、田舎のしかも百姓の身分で、ここに学ぶということは当時と

しては実に珍らしいことでした。名左ヱ門さんはまた四ケ村堰役もしていました。いつも同家を訪れては、何彼と手伝っていた佐兵次は、名左ヱ門さんのお気に入りでありました。川原附近に、鶴巻という所がありました。同家の畑もこの鶴巻にありました。百姓にとって忙がしい春のある日、佐兵次は今日も名左ヱ門さんの所へ来て、畑仕事を手伝っていました。家から随分はなれた畑でしたから、働きに来た人々は昼弁当持参でした。この鶴巻は高い所で松川をはさんで、糠野目窪田の部落が指呼の間に見る所でした。丁度昼食の弁当が終った時でした。佐兵次は、「なぁ、皆の衆、人々はあの土堤をびゃくびと呼んでいるが、よく見らっしゃれ、あれは琵琶の形をしているから、琵琶首というのがほんとうなんだよ」と教えました。それからびわくびと呼ぶようになったのだといわれています。

長い春の日の働きを終えて家に帰る途中でした。丁度十五夜がこうこうと文殊山の頂に出て、昼のように明るく、その美しさは筆舌に絶するほどでした。皆は昼の疲れも忘れてうっとりと見とれていました。その時、頓狂な声で、「二十が出た、二十が出た」と叫ぶ者がいます。見ると佐兵次でした。「何だ、佐兵次さん、

二十とは何のことです」と聞きますと、東の空を指さして佐兵次は「あれ、文殊山から出ましたよ」というのです。「何だ、お月様のことか、どうしてお月様を二十というのです」「お月様を見て、子供達はよく十三・七つというだろう、俺は十三・七つというのが面倒だから、加えて二十といったんだ」人々は思わずどっと笑い出しました。こうして疲れも忘れて家路を急いだということです。

（明治四十五年・安部客次）

18　豆腐であんだ雪がけのこと

萱は露藤名物の一つとなっていますが、雪囲いに用いる萱を材料としてあんだ雪がけは、特に名産でした。晩秋から初冬にかけて何所の家でも競って編んでいましたが、飛ぶように売れたものです。夜業をして三枚は編めたから、当時としてはよい副業でした。ある晩秋のこと、露藤村の名左ヱ門宅では一同炉辺に集まっ

て、談笑の最中でした。そこへあわただしく入って来たのは、顔なじみの佐兵次です。「なんだ佐兵次、そんなにあわてて何か珍らしいことでもあるのか、名左ヱ門さんはそう尋ねました。すると佐兵次は「親方、昨日高畠へ行って珍らしい物を見て来ましたよ」と答えました。家中の者は「そらまた佐兵次のおはこが始まった」と誰もとり合わないでいると、佐兵次は一人で、「珍らしい物だ、今まで見たことがない」としきりに言っています。そこでつい引きこまれて、「一体何んだね、そんなに珍らしい物とは」と尋ねました。「いや、世間をあちこち歩いてみると、いろいろ珍らしい物があるよ、昨日な、豆腐で編んだ雪がけを見て来たよ、ほんとうに珍らしかった」「なんだ馬鹿げている、いくら珍らしいと言っても、豆腐やこんにゃくで雪がけが編めるかい」と、誰も信用しません。「だから珍らしいというんです。俺は実際この目で見てきたんだ。私もはじめ変だと思ったんだが、ちゃんと豆腐なんだからね」。佐兵次のことだから、またやられるなと思ったが、あまり佐兵次の様子が真剣なので、あるいはほんとに豆腐の雪がけを見て来たのかも知れない。それがほんとうなら一度は見たいものだと思った名左ヱ門さんは、

「分ったよ。俺もこの年になるまで、豆腐の雪かけなどというものを聞いたことも見たこともない。百聞は一見にしかずだし、知らざるは一生の恥だということもある。珍らしい豆腐の雪がけを明日案内してみせてくれ」と頼みました。翌日名左ヱ門さんは佐兵次の案内で高畠へやって来ました。「佐兵次、何所にあるんだ。どれもこれも萱の雪がけばかりじゃないか、此所まで人を引っぱり出して、小馬鹿にすると承知せんぞ」だまされない中に一本釘を打っておこうと名左ヱ門さんは言いました。「へい、親方、佐兵次はうそと女は大嫌いですから決していつわりは申上げません」と答えながら、ある一軒の家の前で足を止めました。「親方、あれですよ。確かに豆腐の雪がけでしょうね、下から数えて一ふ、二ふ、三ふ…十ふでしょう。普通の雪がけは八ふ編みですが、これは十ふに編んでいますんで珍らしいと申上げたんです」と言いました。聞いていた名左ヱ門さん、開いた口がふさがらず、雪がけを見入っていたということです。

（大正十五年八月・近野兵蔵）

19　天才的な田植の名人のこと

昔の百姓仕事は随分忙がしかったものです。苗代つくり、種蒔き畑かえし、田うないの仕事、田の耕し方は鋤の手うないでした。備中鍬で十日もうなうと、手はまめだらけ、その痛いこと、身体は綿のように疲れます。それが終ると代かきと田植え、夜は水ひき、猫の手も借りたいとはこのこと。早暁から夕方遅くまで重労働ですから、午前と午後に一回ずつ小昼飯とかタバコといって酒と肴で握飯の御馳走が出ます。田圃の中で飲んで食って働くという生活が続きます。今日も七八人集まって田植えをしていた所にやって来たのは、佐兵次です。しばらく畦に立って田植えの様子を見ていましたが、間もなく大粒の涙を流して、しくしく泣き出したのです。それを見つけた若者が不思議に思って、「どうしたんです、佐兵次さん、どうして田植えを見て泣くのです」と尋ねました。「いや、おはずかしい、だが皆さんの田植えを見ると、みんな思い切って曲げて植えなさる。だのに私が植えると、どうしても曲らないで、真直ぐに植わるんです。それで泣いてい

るんです」と答えました。「何だ、人を小馬鹿にしている、正条に植えるこそむずかしくって出来ないのに、佐兵次に限って曲って植えられないとは…。それが口惜くて泣いているとは、何て人を馬鹿にしている」とぷりぷり怒りました。「おい佐兵次、あまり人を馬鹿にするな。俺達は一生懸命になっても真直ぐに植えられないのに、よし、絶対に曲げないで植えられるというんだな」「そうだ今言った通りだよ、私は皆と違って曲った田植えは出来ないんだよ」これを聞いた一同は「忘れるなよ、今言った言葉を。さぁ曲らないように植えてみろ」と口々に言いました。「よし、植えますから、よく見ていて下さいよ」と、佐兵次は傍の苗を持つと、尻をはしょって田に入り、ポツリポツリと植え始めました。普通の人は後じさりしながら植えて行くのに、佐兵次は前に向って植えて行くのです。尺丈の縄も張りません。それでいて植えたあとは一直線、植えられた苗の角度といい、一株の本数といい、申し分がありません。見ていた人々は唯感嘆するばかりでした。こうして皆にまじって一日手伝い、夜は酒と肴の御馳走になり翌日は気のむいた家に出かけてゆくといった風でした。田植えに天才的技能を発揮した佐兵次は、手

細工にもたん能でした。赤子を入れるいずめこ作りの名人ではたおり機も自作し、馬のさどかけ編みは実に妙技を示したものであった。

（大正十五年八月・近野兵蔵）

20　佐兵次の口説節

ここは露藤佐兵次様よ　　白歯娘がほれたとて
三味線たがってお早の所　　お早よい子よ若衆がさわぐ
数多若衆あるその中に　　枕かわした男がござる
いきな二人は手に手をとって　　お早いずこか行方が知れぬ
あわい色恋涙で明かす　　又も露藤逆もどり

（明治十二・三年）

21　三味線を引きずること

佐兵次は何でも人に負けるということは大嫌いでした。嘉永年中の凶作は米沢盆地一帯を襲い、その惨害は目もあてられぬものでした。役所からは倹約せよと通達は矢つぎ早やに下されました。こうした年の秋のこと、我等の佐兵次が米沢に行ったら、どこからともなく三味線が聞こえて来ました。佐兵次は「こんな凶作の年に、女狂いとはあまりにも憎らしい」と思って、三味線の音を便りに歩いて行くと、一軒の料理屋で、年の頃なら五十才ぐらいの男が酒に酔って側に若い女を二人も引きよせて、三味線をひかせて歌をうたっているのでした。佐兵次はいきなりその屋敷にのこのこと入って行きました。そして、「お客さん、この姉さんはあまりにも三味線が下手だよ。佐兵次から見ると、まるで素人だよ」と言いました。お客は「おや、誰かと思ったら、佐兵次さんかい、お前三味線ひかれるかい」と半ばあきれて言いました。すると佐兵次は「三味線なら幼ない時から稽古したものだよ、ひいてお目にかけるかい」というと、出て来た料理屋の主人が、

「ほう、ひかれるのかい、それならひいてみろ」「よしよし、ひきましょう」とこの家の一番よい三味線を借りて、何をするかと思うと、三味線の棹に中縄を結びつけて、「よし、これからひくぞ」と、不思議そうに見ている主人や女共を尻目に佐兵次がそのまま外へ出て、三味線を道路に投げ出し、縄で引きずって走って行ってしまいました。驚いたのは主人や女共で、それっとばかり佐兵次の後を追かけて行きました。けれども佐兵次の早いこと早いこと、やっと追ついた時には、もう三味線は棹は折れ、糸は切れ、見るも無惨な有様となっていました。やがて佐兵次は襟を正して、

「旦那さん、佐兵次のいうことを、ようく聞いてもらいたい。今年は大凶作で、村人は三度の御飯も十分に食えないという時に、いかに米があり、金がある身分とはいっても、少しは世相というものを考えてもらいたい。それに真昼間から歌え騒げはもっての他ではありませんか」

と、形を正しての意見に、お客も主人も色をなくして、「佐兵次、悪かったよ」と詫をしたということです。

（平間良重）

22　屋根葺と知恵競べのこと

その頃、米沢から最上に通うには赤湯町から取上坂を越え、中山を通って、つづら折りに山を登り下りして上山に出たものです。今の中川村には谷間に点々と村が散在していました。その中に川樋という所がありました。この川樋にも佐兵次の知り合いがありましたので、今日もそこを訪ねました。丁度その家では四人の屋根葺が来て、屋根を葺いていました。屋根葺の一人があまり風采のあがらぬ佐兵次を見て、一つからかってやろうと思って、

「佐兵次さんや、お前は皆から名人上手といわれているそうだが、どうだい、俺達の真似は出来るかい」

と言いました。佐兵次は笑いながら、

「屋根葺さん、お前方も人なら、佐兵次も人、お前方のすることならなんでも出来るよ」
「これは面白い、だが、もし出来なかった時はどうする」
「屋根葺さん、それは貴方がたが先手をうってのことかも知れないが、それではもし佐兵次が勝ったらどうしますか」
「よし、俺達の四人の一日の日当を全部出すよ」
「そうか、よしよし」
「だが、お前が出来ない時は…」
「お前達の言う通りにするよ」
「だが待てよ、佐兵次さんは無一文だから、酒を買ってもらうわけにはゆかないし、仕方ないから、毎日屋根葺に手伝いをしてもらおう」
「いいよ」
ということになって、いよいよ屋根葺を競争することになりました。屋根葺の一人が一つ力で負かしてやろうと、丁度いい所にあった玄米俵（四斗六升入）が

あったのを横背にして立ち上がった。すると佐兵次も負けていません。これも二俵背負うと軽々と立上がったのです。それを見ていた他の屋根葺が、

「それじゃ、こんどは屋根葺でこい」

と、するすると屋根に上って行きました。続いて佐兵次も屋根に上って行きました。屋根葺は如何にも馴れた手つきで鋏を動かします。佐兵次はどうかと見ると、これは不思議、何と本職の屋根葺と同様に鋏を使い、へらを使って屋根を葺いてゆくではありませんか。屋根葺は心の中では舌を巻きながら、あくまでやっつけてやろうと、

「屋代郷の破風は台所の上にあったな」

というと、佐兵次は、

「いや、台所と座敷の境にあるよ」

という。これはしまったと、こんどは矛先を変えて、

「佐兵次さん、屋根葺は何時も高い所で仕事をするんだから、職人は屋根葺が一番ですよ」

というと、佐兵次は、

「屋根葺さんは、随分自慢されるが、高い屋根におれば落ちる心配がある。もしも落ちてしまえば死んでしまうよ」

屋根葺は、畜生めと最後の知恵をしぼって、

「佐兵次さん、木を二つ合せれば何かい」

というと、

「何んだ、そんなことも知らんのか、林じゃないか」

屋根葺はますますあわてて、

「じゃ、桜という字は何と読むか」

すると佐兵次はにやりと笑って「十八の女が二貝（階）の下にいるだよ」。何を尋ねても即座に答えるので、屋根葺達はとうとうかぶとを脱いで、四人分の日当を二人分にまけてもらって、佐兵次に謝ったということです。

23　自分が食うには足りない

佐兵次は時として、とても無邪気なところがありました。ある日のこと、米沢の城下の菓子屋の前に立って、お菓子を見ていました。それを見つけた菓子屋の内儀さんが、

「佐兵次さんや、お前、さっきから店先に立って眺めているが、お菓子でも買うつもりかえ」

といいました。すると佐兵次は、

「これは内儀さん、実は佐兵次は空腹で、この餅でも食べたいなと思っているところです」

すると、内儀さんは、

「そう、店のお菓子も餅も特別にうまいよ、買ってくれ」

佐兵次は、

「そんなにうまいかい、じゃ、売ってくれ」

と、財布から金を出して数えている様子、
「内儀さん、この餅、うまいかい」
内儀はてっきり買うものと思い、
「宅のお菓子も餅もうまいのは、誰もが賞めているよ、一つ食って見てくれ」
というと、佐兵次は早速お菓子をつまみ上げて口に入れ、むしゃむしゃ食います。
「お菓子もうまいが、餅はどうだい」
餅をつまんで口に入れてうまそうに食べます。さんざん食って、
「あんまりうまいから、もう買うのはやめたよ」
と出した財布をしまってしまいました。内儀さんが不思議に思って、
「うまいからやめるとはどうしてだい」
と聞くと、
「あんまりうまくてうまくてたまらないので、とても今店にあるものだけでは足りないよ、今度、沢山あるときに来て、十分食うつもりだ」

といって、そのまま店を立ち去ったということです。

（宇佐美滝蔵）

24　御法度の糯米を持ち込むこと

こんなことがありました。背にかますを背負って番所にさしかかりました。見れば大分重そうなので、誰が見ても穀物と見えます。役人も見とがめて、

「こら、佐兵次、背中の物は何だ」

と引きとめました。すると佐兵次は、「はい糯米だっす」と答えました。役人は怒って、

「けしからん奴め、糯米は御法度ということを知らんか」

というと、

「へぇ、それはよく知っています。役人様」

「知っていながら、背負ってくる奴があるか」

と、かますを引きずり下ろして見ると、中に糯米などありません。役人はまた佐兵次に、してやられたと思い、「こら、役人を嘲弄するか」と怒りました。

「これはこれは、お役人様、それはあなた方のひがめと申すもの、佐兵次は決して偽りは申し上げませぬ。世間の人は佐兵次を見ると、『佐兵次や、お前は背中に糯米を背負っているな』というんで、佐兵次は解せませぬが、皆が糯米を背負っている、糯米を背負っているというんで、私もついそう思うようになりました。それでお答えしたのです」

役人も苦笑して、

「あんまり馬鹿正直であるからよ、貴様。着物にしらみがいるだろう。だから人々から馬鹿にされたんだ」

佐兵次は、「お役人様は何んでも知ってお出でになる。ではさようなら」と番所を通り、一町も来た頃、「役人の馬鹿ぞろい」と一人言を言いました。翌日のこと、またもや、佐兵次がかますを背負って番所にやって来ました。

「お役人様、糯米を背負って参りました」

というと、「よいよい、通れ通れ」と役人はうるさそうに佐兵次を通してしまいました。実は今日はかますの中には、糯米が五升も入っていたのです。佐兵次はそれを売って、少くない金をもうけました。

（近野　久）

あとがき

数年前にガリ版刷りの『佐兵物語』を見る機会があり、昨年文部省より科学研究費の補助金の交付を受けたので、「木小屋話」の中で、置賜地方に伝承されている「佐兵ばなし」をまとめる仕事にとりかかり、前述『佐兵物語』の原型と考えられる『名物男佐兵次の逸話』を見せてもらい、その印刷の許しを得ました。勿論昔話の話者から「佐兵ばなし」を聞くことが中心でしたが、このような形に残しておくことも十分な意義があると考えた次第です。「佐兵ばなし」と同系のものの「長手の伊佐」も併せて記録しました。話者をはじめお世話下さった方々に改めて、ここに感謝申上げる次第です。

文部省科学研究費補助金（奨励研究Ｂ）の報告の一部であることをおことわりします。

昭和四十六年一月十日

佐兵ばなし
木小屋話資料
編者　武田　正
発行日　昭和四十六年一月十日
住所　山形県南陽市三間通二三二ノ三

＊本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成十九年四月一日

山形短期大学民話研究センター
〒九九〇―二三一六
山形市片谷地五一五
山形短期大学附属図書館内
（電話）〇二三―六八八―七五四四